

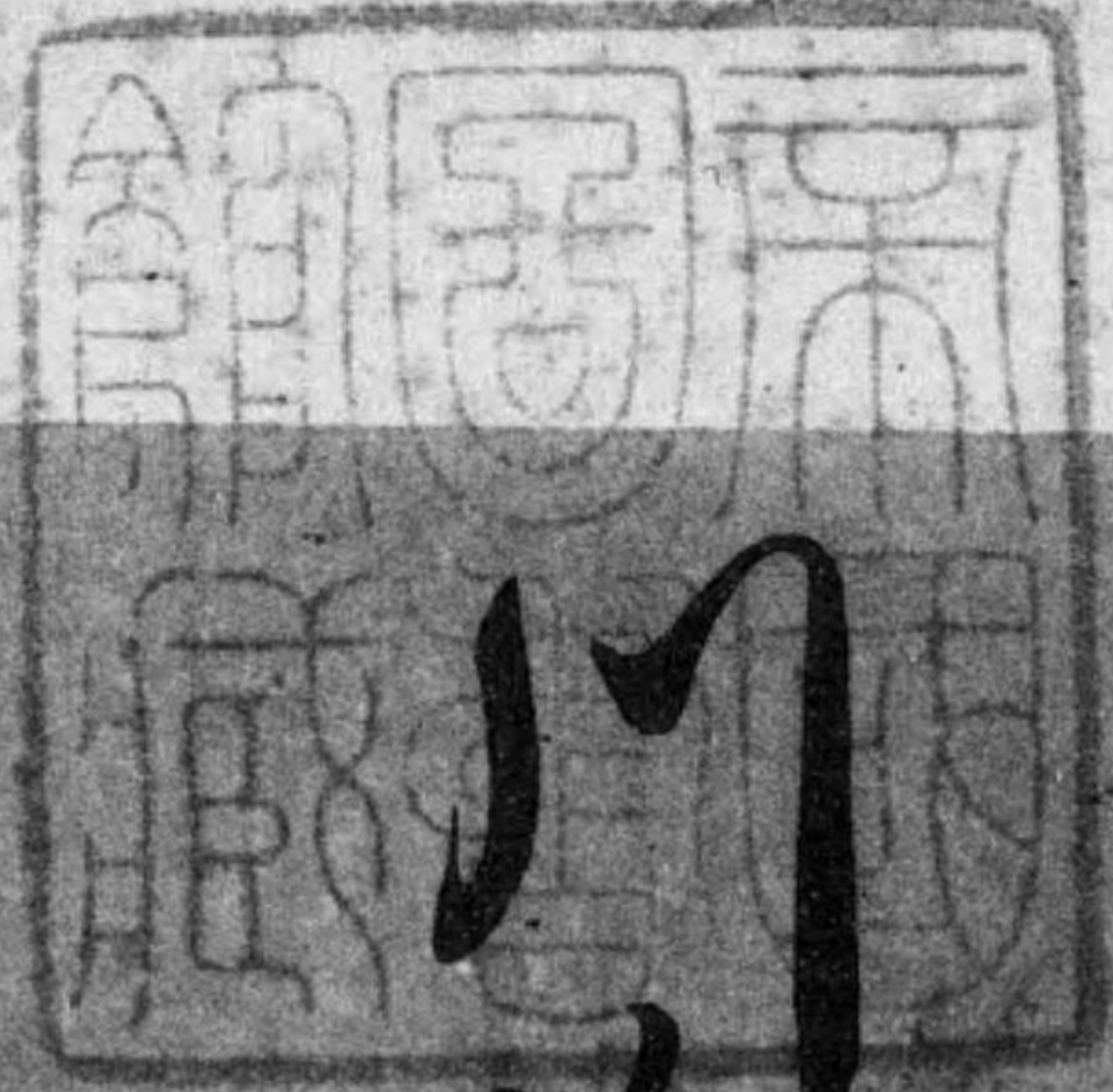
551  
35



始



450



川柳江戸名物

西京柳雨

大正  
15. 2. 5  
内交

## 川柳江戸名物

## 序言と凡例

一、川柳狂句に詠残された江戸の名物を蒐録して解説を附し方外人の江戸名物狂詩選に倣ひ江戸名物狂句選と題し朝倉無聲氏発行の月刊雑誌江戸趣味第二卷第一號（大正六年七月）より掲載せしが同誌は第二卷第四號を以て廢刊となつた其後細野一軸氏発行月刊柳誌江戸鹿子第八輯（大正十年十月）より其續稿を掲載せしが不幸にも同誌も亦第十三輯を以て廢刊の運命となつた。

一、既出名物七十餘種句數約五百首に訂正増補を施し更に殘餘百五十餘種千餘句を加へ總計二百二十種許千五百餘句となし漸く完結を告げたので更に川柳江戸名物と改題し茲に上梓することになつたのである。

一、本書編纂に就て多く参考したる本は紫草（江戸商標集）江戸買物案内、名物かのこと、方外人著江戸名物狂詩選、守貞漫稿、江戸名所圖會、等である。

一、句尾に附したる年號の略字は左の通り。

(寶) 寶曆及其以前

(明) 明和

(安) 安永

(天) 天明

(寬) 寬政

(化) 文化

(政) 文政

(保) 天保及其以後

(?) 年代不明の句、

以上

大正十五年一月

柳雨しるす

# 川柳江戸名物

## 目録

### 第一章 飲食物の部

(一)	和泉饅頭	.....	一
(二)	虎屋饅頭	.....	二
(三)	鶴屋米饅頭	.....	三
(四)	龜屋柏餅	.....	四
(五)	阿鐵牡丹餅	.....	四
(六)	淺草大佛餅	.....	六
(七)	金龍山淺草餅	.....	七
(八)	和國餅	.....	九
(九)	鹿子餅	.....	二

頁數

(一〇) 唐林小倉野……………二  
 (一一) 長命寺櫻餅……………三  
 (一二) 若松屋幾世餅……………三  
 (一三) 助 總 燒……………五  
 (一四) 永代團子……………九  
 (一五) 廣德寺前汁粉……………〇  
 (一六) 栗餅の曲搗……………〇  
 (一七) 目黒の栗餅と餅花……………二  
 (一八) 川 口 屋 飴……………五  
 (一九) 桐屋三官飴……………七  
 (二〇) 切通猿飴……………元  
 (二一) 淀橋辨慶飴……………〇  
 (二二) 堀江町の焼芋……………三  
 (二三) 翁 煎 餅……………三

(二四) 梅ヶ枝煎餅……………三  
 (二五) 姿見煎餅……………三  
 (二六) 雷おこし……………三  
 (二七) 御所おこし……………四  
 (二八) 浅草輕燒……………五  
 (二九) 三國一甘酒……………六  
 (三〇) 竹村最中……………七  
 (三一) 金澤の菓子……………元  
 (三二) 舟橋屋羊羹……………〇  
 (三三) 山本山茶……………一  
 (三四) 池端香煎……………一  
 (三五) 更 紗 梅……………四  
 (三六) 甘 露 梅……………四  
 (三七) 無極庵蕎麥……………六

(三八) 玉屋蕎麥……………四六

(三九) 稻荷蕎麥……………四七

(四〇) 團子坂藪蕎麥……………四八

(四一) 道光庵蕎麥……………四八

(四二) 深大寺蕎麥……………四九

(四三) 正直蕎麥……………五〇

(四四) 釣瓶蕎麥……………五一

(四五) 翁蕎麥……………五一

(四六) 狸々庵蕎麥……………五一

(四七) 坊主蕎麥……………五三

(四八) 小倉蕎麥……………五四

(四九) 福山蕎麥……………五四

(五〇) 笹屋鰻鮎……………五五

(五一) 壺屋泡雪……………五六

(五二) 兩國泡雪……………五六

(五三) 根岸笹の雪……………五九

(五四) 眞崎田樂……………六一

(五五) 豊島屋田樂……………六一

(五六) 山屋豆腐……………六七

(五七) 小川町御用豆腐……………六九

(五八) 阿滿ヶ鮎……………六九

(五九) 與兵衛鮎……………七〇

(六〇) 安宅松ヶ鮎……………七一

(六一) 蛇目鮎……………七三

(六二) 翁鮎……………七三

(六三) 翁屋煮染……………七三

(六四) 蓬萊屋茶飯……………七四

(六五) 萬久幕内……………七五

(六六)	女川菜飯	.....	七
(六七)	山吹茶漬	.....	七
(六八)	源氏茶漬	.....	七
(六九)	梅ヶ枝茶漬	.....	八
(七〇)	浮世茶漬	.....	八
(七一)	海道茶漬	.....	八
(七二)	奈良茶	.....	八
(七三)	佛店蒲焼	.....	八
(七四)	山谷重箱	.....	七
(七五)	田原町奴鰻	.....	八
(七六)	森山蒲焼	.....	九
(七七)	和田平蒲焼	.....	九
(七八)	白鬚穴鰻	.....	九
(七九)	田川鱈料理	.....	九

(八〇)	海老屋と扇屋	.....	九
(八一)	萬八の料理	.....	九
(八二)	平清の會席	.....	九
(八三)	八百膳の仕出	.....	九
(八四)	植半の精進料理	.....	九
(八五)	大七の洗鯉	.....	九
(八六)	葛西太郎の鯉濃漿	.....	九
(八七)	武蔵屋の鯉濃漿	.....	九
(八八)	御留川紫鯉	.....	九
(八九)	小松川の鶴	.....	一〇
(九〇)	佃島の白魚	.....	一〇
(九一)	深川の剥身	.....	一〇
(九二)	業平橋の蜆	.....	一〇
(九三)	淺草海苔	.....	一〇

(九四) 伊皿子麩 ..... 一〇七

(九五) 野田屋蒲鋒 ..... 一〇七

(九六) 安針町の烏屋店 ..... 一〇八

(九七) 平河町の獸肉屋 ..... 一〇

(九八) 關口茗荷 ..... 一一

(九九) 八房唐辛 ..... 一三

(一〇〇) 鳴子瓜 ..... 一四

(一〇一) 砂村瓜 ..... 一四

(一〇二) 駒込茹子 ..... 一五

(一〇三) 四方の酒味噌 ..... 一六

(一〇四) 豊島屋白酒 ..... 一九

(一〇五) 内田屋劍菱 ..... 二一

(一〇六) 山屋の墨田川 ..... 二四

(一〇七) 宮戸川と都鳥 ..... 二五

第二章 藥品の部 .....

(一〇八) 三丁目生藥 ..... 二七

(一〇九) 酢屋三臟圓 ..... 三〇

(一一〇) 木谷實母散 ..... 三〇

(一一一) 本町の孫太郎 ..... 三三

(一二二) 近江屋感應丸 ..... 三三

(一二三) 奇應丸 ..... 三三

(一二四) 勸學屋錦袋圓 ..... 三四

(一二五) 朔日丸 ..... 三六

(一二六) 龍王湯 ..... 一四〇

(一二七) 桐山地黃丸 ..... 一四〇

(一二八) 俵屋風邪藥 ..... 一四一

(一二九) 鐘馗散と益氣湯 ..... 一四二



(110) 田町反魂丹 ..... 110  
 (111) 虎屋外郎と五種香 ..... 111  
 (112) 定齋 ..... 112  
 (113) 大森の和中散 ..... 113  
 (114) 烏丸枇杷葉湯 ..... 114  
 (115) 陀羅尼助 ..... 115  
 (116) 藤八五文 ..... 116  
 (117) 香需散 ..... 117  
 (118) 紫金錠 ..... 118  
 (119) 袖の梅 ..... 119  
 (120) 四目屋長命丸 ..... 120  
 (121) 堀越固本丹 ..... 121  
 (122) 王子五香 ..... 122  
 (123) 大阪屋すほうとう ..... 123

(134) せいめい丹 ..... 134  
 (135) 浅田いれのこりこう ..... 135  
 (136) 北斗香 ..... 136  
 (137) 笹屋目薬 ..... 137  
 (138) 無名圓 ..... 138  
 (139) 白龍膏 ..... 139  
 (140) 駝駝膏 ..... 140  
 (141) 美濃屋梅花膏 ..... 141  
 (142) 徳兵衛膏藥 ..... 142  
 (143) 熊野傳三膏藥 ..... 143  
 (144) 居合拔の賣藥 ..... 144  
 (145) 兼康祐元齒磨香 ..... 145  
 (146) 井口の齒磨 ..... 146  
 (147) 白雪糕 ..... 147

(一四八) 堺屋芭蕉膏.....一五

(一四九) 達磨藥.....一五

(一五〇) 三星藥.....一七

(一五一) 王水疥癬藥.....一七

(一五二) 釜屋艾.....一七

(一五三) 三樹艾.....一九

(一五四) 瀨川艾.....一八

(一五五) 岩見銀山.....一八

(一五六) 幸手屋虱藥.....一八

(一五七) 鍋屋虱紐.....一八

第三章 化粧品の一部

(一五八) 下村山城伽羅油.....一七

(一五九) 三馬の江戸の水.....一八

(一六〇) 五十嵐髪油.....一九〇

(一六一) 百助梅花香.....一九一

(一六二) 二十三屋唐櫛.....一九二

(一六三) 十三屋櫛.....一九三

(一六四) 松本岩戸香.....一九三

(一六五) 阪本仙女香.....一九三

(一六六) 音羽屋白粉.....一九七

(一六七) 門之助洗粉.....一九八

(一六八) 車坂櫻香.....一九八

(一六九) 梅花香.....一九九

(一七〇) 美立香.....一九九

(一七一) 雲井香.....二〇〇

(一七二) 白牡丹.....二〇〇

(一七三) 江戸ばつちり.....二〇一

(一七四) 玉屋紅.....101  
 (一七五) 味噌屋元結.....101  
 (一七六) 文七元結.....101  
 (一七七) よし屋化粧品.....101

第四章 袋物小間物の部.....

(一七八) 丸角の袋物.....104  
 (一七九) 越川の袋物.....105  
 (一八〇) 住吉屋烟管.....108  
 (一八一) 村田屋烟管.....109  
 (一八二) 伊勢松小間物.....110  
 (一八三) 日野屋小間物.....110  
 (一八四) 紀國屋烟管.....111  
 (一八五) 菊岡三味線屋.....111

(一八六) 唐木屋三味線絲.....113

第五章 呉服店の部.....

(一八七) 越後屋.....115  
 (一八八) 恵比壽屋と布袋屋.....115  
 (一八九) 大丸.....117  
 (一九〇) 古着店.....119

第六章 玩具類の部.....

(一九一) 山下の菅凧.....115  
 (一九二) 龜山のお化.....115  
 (一九三) 今戸人形.....117  
 (一九四) 番場の達磨.....119

第七章 書物文房具の部.....

(二九五)	須原屋武鑑	二七〇
(二九六)	出雲寺書店	二七一
(二九七)	星運堂の柳樽	二七一
(二九八)	鶴屋の繪草紙	二七二
(一九九)	葛重の細見	二七三
(二〇〇)	伏見屋繪草紙	二七四
(二〇一)	鱗形屋の寶舟	二七五
(二〇二)	山本の番附	二七五
(二〇三)	古梅園の墨	二七六
(二〇四)	五郎兵衛紙屋	二七六
第八章 雜の部		
(二〇五)	江戸紫	二七七
(二〇六)	本升屋火打鎌	二七九

(二〇七)	釜屋堀の釜	二八〇
(二〇八)	今川橋瀬戸物	二八〇
(二〇九)	小網町貝杓子	二八一
(二一〇)	猫屋の珍材	二八一
(二一一)	外法下駄	二八二
(二一二)	照降町の傘と雪駄	二八四
(二一三)	茅場町の傘	二八五
(二一四)	堀江町の團扇	二八六
(二一五)	御影扇堂	二八七
(二一六)	日高屋繪馬	二八八
(二一七)	淺草の酒中花	二九〇
(二一八)	猿屋楊枝	二九一
(二一九)	淺草紙	二九二

# 川柳江戸名物

西原柳雨編



## 第一章 飲食物の部

### (一) 和泉饅頭

日本橋本町三丁目に暖簾を掲げて居た名代の老舗であるが、方外道人の「江戸名物狂詩選」には、鳥飼和泉無鳥飼、饅頭日々注文多、唯軟皮薄餡尤好、荷出蒸籠日幾何、と賞稱へて居る。狂句の方では、

鳥飼は下戸の建てたる藏ばかり  
三丁目饅頭の外にがい見世  
鳥飼は一文見世と下女おもひ

(政)  
(化)  
(化)

などの句がある、一體本町三丁目といへば、生薬屋が軒を並べた所で、苦いものばかり商つてゐる中に、甘い物屋と云つてはたつた鳥飼一軒であつたとの意であるが、第三句の鳥飼は取替の語呂で、當時取替べい〜と呼歩き、一文二文の古金と取替る飴屋があつたから、下女が斯く思ひ違ひをしたとの句意であらう、猶内田屋の劔菱及第二章三丁目生薬の條参照のこと。

### (二) 虎屋 饅頭

猿若へ七ツ目を積む賑かさ

(寛)

の句は、堺町中村座顔見世狂言に、虎屋の蒸籠を積んだ様を呼んだ句で、申から七ツ目は虎に當るといふ謎のやうな狂句である、此虎屋は和泉町に在つた名代の饅頭屋である。

安芝居竹の皮から虎を出し

(化)

けちな土間割清正の禮に虎

(化)

甲は竹に虎の結び、乙は蛇の目餅の返禮に虎屋の饅頭を贈るとの意。

藪の内積む蒸籠は虎屋なり

(保)

此句は天保十三年水野の大改革に、従來の二丁目及び木挽町の芝居を悉く淺草山の宿、小出候

の邸趾に移し、猿若町と稱した時以來の句にて、藪の内とは猿若町の入口にて其一丁目の角に高林家號虎屋と云ふ饅頭屋があつたのである、此虎屋は芝居と共に和泉町より移轉し來たものか、或は全く別であるかは未調である。

### (三) 鶴屋米饅頭

「墨水消夏録」には、元祿の頃淺草聖天町鶴屋といふ菓子屋より始めて賣出すと記して、遺佚が狂歌「根本はふもとの鶴屋うみぬらん米饅頭は玉子なりけり」を添へてあるが、一説には慶安の頃淺草鶴屋の娘よねなるもの製し始めたとある、孰れが實説であるかは知らぬが。

鶴はまん龜はせんにて名が高し

(?)

といふ句は、饅頭と煎餅とを利かせて、鶴は千年龜は萬年を反對にいつた趣向であるが、鶴の饅頭に對する龜の煎とは龜子煎餅を云つたものゝやうだが、併し龜子煎餅の本舗は何町何屋であるか明かでない、尤も鯉文作の「箱根草」には神奈川の名物に此物ある趣きを記して居るが、神奈川だとすれば一方の鶴饅は、寧ろ川崎にした方が對照の具合がよいやうである、東海道の數へ歌にも「六郷渡りて川崎の萬年屋、鶴と龜との米饅頭」とある通り、川崎にも同名の饅頭があつた

4 事は明かである。つまり此句は孰れとも判然せぬが、識者の叱正に委して茲に掲げて置いたのである。

(四) 龜屋柏餅

外神田旅籠町御成道にあつた名物で、「狂詩選」に寶生門外暖簾龜、萬歲千秋柏葉菜、形小色白何足賞、喰來第一味憎宜、とあつて、店の暖簾に龜の模様が染出してあつたものと見えるが。

鶴は餅龜は團子で名が高し (明)

の句は、果して夫を咏んだものか、尤も別に龜屋團子といふものが、飯倉片町にあつたといふから、或は其方でなからうかとも思はれる、其取捨は讀者にお委せして、唯參考までに引用して置いたのである。

(五) 於鐵牡丹餅

酒の座へ出ぬはお鐵とお龜なり (保)

のお龜は無論前項の團子であるが、お鐵は麴町三丁目裏北横町馬場の角で賣つた胡麻餡の牡丹

餅で、山の手名物の一として數へられ、「狂詩選」にも馬場之角一軒家、於鐵數年此地誇、盛出盆中胡麻餡、人間賞爲牡丹花と稱へてゐる。



牡丹餅だけれどお鐵は味がよし (政)  
お鐵よりよいと九月の十二日 (保)

5 牡丹餅とは柳界で醜婦の異名として用ゐらるゝ常套語、九月十二日は日蓮上人が龍の口御難の當日にて、法華宗では御難の餅とて胡麻餡の餅を造つて供へる事は、よく人の知る通りである。

(六) 浅草大佛餅

浅草並木町兩國屋清左衛門は其根元で、もと京都方廣寺大佛殿の前にあつたのに倣ふて製したものである、看板には黒の丸に大の字を白く染抜き、京都名物と添書がしてある、天明四年板「狂歌角力草」に、子孫彦の「大佛の餅に思をこめ依契りつゝ、まんかきのれんかけ」と云ふ狂歌を擧げてある、但し暖簾は柿色であつたとのこと。



浅草で下戸は佛を買つてくひ

(政)

大佛に出現をする咽佛

(保)

大佛餅も本來は菩薩なり

(保)

菩薩から大佛になる民の汗

(化)

などの句は、皆それを詠んだものであるが、菩薩とは米の異名。

(七) 金龍山餅

金龍山畔金龍餅、餅白餡甘黄粉新、日々観音參詣客、掛腰頻食幾千人、と「江戸名物狂詩選」にある通り、浅草寺境内に在つた名代の黄粉餅である。

浅草餅の極最初は、天和の頃桔梗屋安兵衛と云ふもの、傳法院前大榎の下に葦簀張をした些細な見世であつたが、段々繁昌して其向側馬道三丁目入口の角、錦袋圓樂屋（池の端のとは別也猶其條参照）と、二十軒茶間との間に移つたと云ふことが「江戸名所圖會」に書いてある。

御地内も餅屋を越すと美しい

(安)



御手水と餅屋の間で日を暮し

(安)



の餅屋は云ふ迄もなく、浅草餅であるが、昔は二十間茶屋と仁王門との間に手洗水があつたと亦「東京名所圖會」に明記してある。

榎の僧正は餅屋の向う也  
 別當の門と餅屋は向ひ合ひ  
 別當へ後を向けて下戸這入り

(明)  
 (安)  
 (安)

別當は傳法院、榎の僧正とは徒然草を臭はして其住持を云つた趣向である。

山號を書いた暖簾を下戸くゞり  
 餅がつかへたで榎をにらめてる  
 餅くひたさうに榎は口をあき  
 玉蟲を浅草餅の子が見附け

(安)  
 (天)  
 (天)  
 (安)

など最早説明の要はないが、玉蟲はよく榎に居る蟲である。

お内儀は浅草餅を取つてなげ

(寶)

観音様を賣つて吉原へ行き、歌舞の菩薩を買つて來たお土産の浅草餅は、奥様の御悋氣で焼餅と成つて仕舞つた。

樂屋から金龍山を買つて食ひ

(保)

此樂屋は天保十三年に芝居町となつた猿若町の樂屋であること云ふ迄もない。

(八) 和 國 餅

和國橋(現在の萬橋)を渡りて新材木町より杉森稻荷へ入る角にあつた、伊勢屋七郎兵衛と云

ふ餅屋であるが、安永六年の「江戸自慢評判記」に誓願寺前輕焼と並べて上々の位附に成つてゐる、此地面は昔夫殺しの大罪を犯してお仕置と成つた白子屋お熊、芝居の即ち白木屋お駒の家の趾であつたと云ふので。

大膽な娘のあとへ餅屋越し (天)

白粉屋のあと餅屋とは思附き (安)

たしかお熊はこゝらだと餅を食ひ (安)

八丈のことで日本の餅も賣り (天)

などの句があり、蓋し八丈とあるはお熊が仕置になる時に、黄八丈の小袖を着て居たと居ふからであらう、芝居の名題を戀娘昔八丈とせしは多分夫から出たのであらうと思はる。

和國餅どちらがよいと聞く所 (明)

どろくと二度に賣切る和國餅 (明)

甲二丁町に近き所なれば、市村座と中村座とどちらが評判がよいかと聞かれるとなるべく、乙は其二座の閉場であらう。

和國餅地響がして賣切れる (賣)

此地響は江戸時代屢々興行せられた杉森稻荷社の勸進相撲であらう。

和國とは虎と争ふ家名なり (明)

虎は新和泉町の虎屋饅頭、國姓爺の和藤内を臭はした趣向かと思はる。

(九) 鹿子餅

寶曆頃の俳優、嵐音八が人形町にて賣始めた餅にて人形の看板を出し居たりとの説あり、此餅屋は寛政の頃囃子頭の太田市左衛門と云ふ者が譲受けたとある。

鹿子餅にっこともせず折節る (明)

音八は道化方の名人として知られてゐるが、舞臺にて見物を笑はせるにも似ず、内では滅多に白い齒も見せず、むづかしい顔をして時折見世に居るとなるか疑はし。

鹿子餅釋迦の天窗の後向き (政)

只その形容に過ぎぬ。

(一〇) 唐林の小倉野

これは日本橋西河岸にあつて。

小倉野は釋迦の天窓のやうに見え

(保)

とある通り、小豆餡を一面に塗した餅菓子であるが、例の「狂詩選」に甘味十分小倉野、喰來一碗薄茶清、巻皮養性遠山餅、盡是唐林新製名とある所から見ると、色々な名を附命けて賣出したものと思はる、猶句面より見れば鹿子餅と似たやうなものであつたらしい。

(一一) 長命寺櫻餅

焼ながら女房のくふ櫻もち

(明)

句義は云ふ迄もなく櫻から夜櫻である、曾て「集古會誌」には、「嬉遊笑覽」の「近年隅田川長命寺の内にて櫻の葉を貯へ置き、櫻餅とて柏餅のやうに葛餅にて作る」とあるのを引いて、文化頃つくり初めしものかと疑ひを容れてあるが、此句を明和代とすれば、夫よりも以前から行はれてゐたものゝやうに思はれる、猶同誌に文政七年元祖山本屋新六見世一ヶ年の賣高を勘定して、製造高三十八萬七千七百個、一個の價四文として二百二十七兩一分二朱とある所から見ても、餘程盛んに賣れたものらしい、「狂詩選」に轍高長命寺邊家、下戸争買三月頃、此節業平吾妻遊、不

吟ニ都鳥吟ニ櫻餅とあるに徴しても、其盛況が思ひやられる。一説に山本屋先祖は元祿四年銚子より來りて當時の門番となり、享保年間吉宗公櫻樹を墨堤に植附られし頃より工夫し始めたところ、大正十二年九朔の大震火災には焼失したるも直に復興して今に盛に賣出してゐる。

隅田川を渡る  
名物 櫻もち  
山本屋製

(一二) 若松屋幾代餅

兩國吉川町にあつて、「狂詩選」には兩國一番若松屋、雜煮汁粉客來頻、世間名物多零落、幾代

獨歴幾代春、とあるが、柳句の側には。

見附けからくひたさうなる幾世餅

(寶)

唐金を煎じては出す幾代餅

(明)

幾代餅義理一ぺんの茶をのませ

(明)

國境下戸はこつちへいくよ餅

(保)

立わかれ右はこつちへいくよ餅

(政)

などの句がある、尤も下の二句は全く同想同吟で、下戸といひ右といふは孰れも上戸の左に對しての稱で、即ち甘黨を云つたものである、蓋し袖を分つて下總の方へ行く左り組は、恐くは泡雪で一杯といふ寸法であらう、泡雪の事は後文に掲ぐる積りである、猶外に幾代餅を咏込んで句も二三あるが、少々破禮氣味で胸に痞え、御座敷に持出せないのは遺憾である。

朝倉無聲氏曰く。幾世餅の元祖は淺草御門内藤屋市郎兵衛なり、元祿十七年小松屋喜兵衛といふ者、吉原の遊女幾世を落籍して、西兩國廣小路に店を構へ、妻の源氏名を取りて幾世餅と名付けて賣出しけるに、當時いと珍しき事に噂せしを、寶永初年中村七三郎幾世餅賣に扮せしより益々其名高く、遂に藤屋を壓倒するの全盛を至せり、然るに賣居と

唐様で書く三代目(天明頃)より漸次衰微して、天保年代には若松屋の爲に其株を奪はれしこそ遺憾なれ。

又『俚諺集覽』には餠を附けたる餅一つ五文宛とあり、『續江戸砂子』には兩國橋西詰小松屋喜兵衛元祿十七年に初めて製すと記し『近代世事談』には根元は兩國橋西詰にあり、前は鐵砲町に住して小さき餅屋なりしが、妹婿たる藤宿の老百姓某と共同して元祿十七年に舗を開き大に繁盛し、今所々に此名あるはこれに准ふものなり、何故幾世餅と名づけたるにやと疑を挾んでゐる、『狂歌江戸名所圖會』に「入口に掛けたる太き繩すだねぢりてちぎり出す幾世餅」と云ふ狂歌が出してある、入口の模様等もほゞ推想せらる、『東京名所圖會』は維新前後幾世餅の看板見えすなりぬ、今はふじ屋とて旅人宿に轉業したりしかと附記し、矢田氏の『江戸から東京』へには、小松屋は舊幕時代に、藤屋は明治九年頃に没落したとある、いづれも参考の爲に附記しておく。

(一三) 助 總 焼

助總とお鐵近所でうまい中

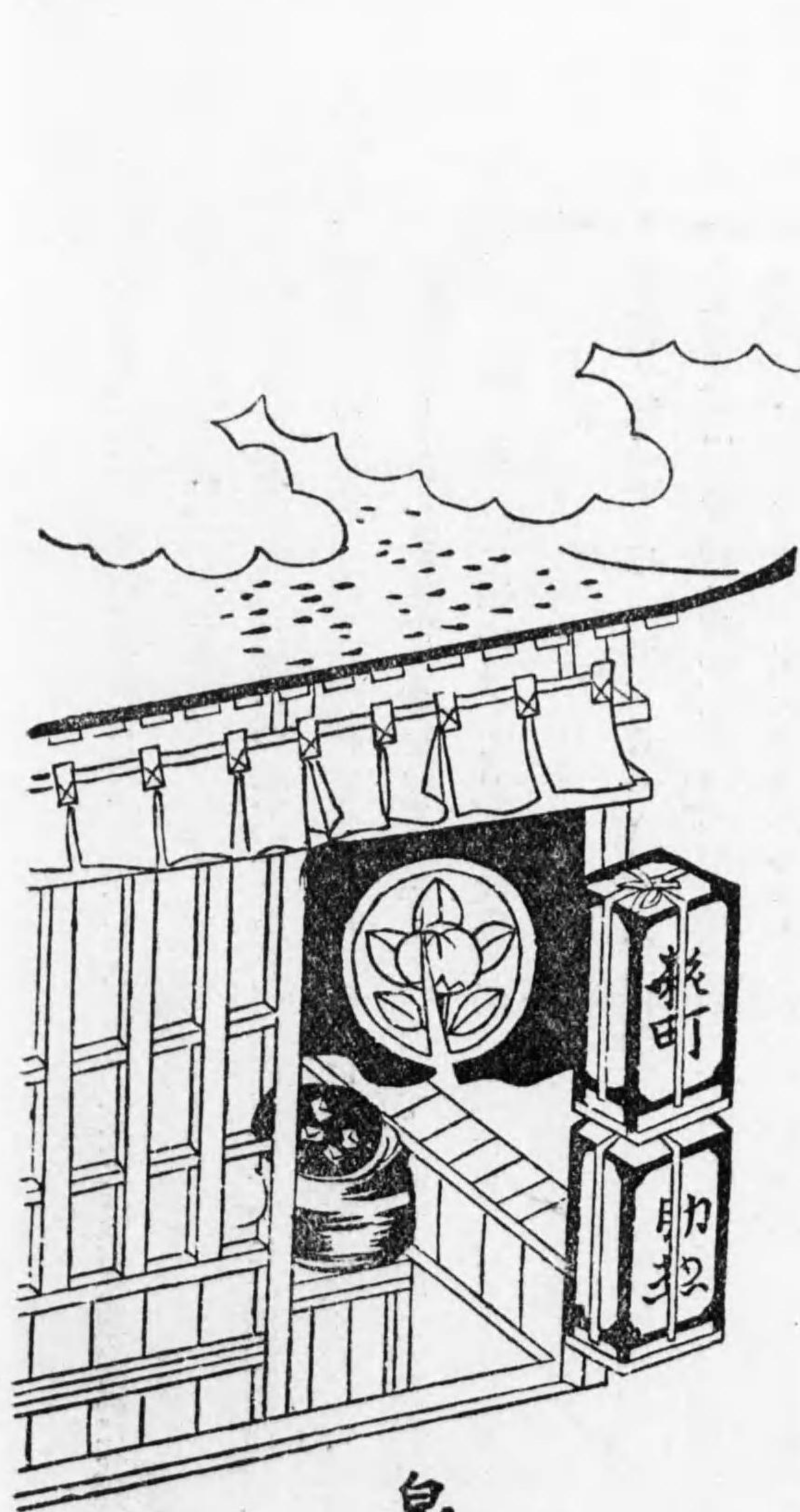
(政)

とある通りお鐵牡丹餅屋と同じ麴町三丁目に在つて、其看板に「根本助總、出店一切無御座候」

供<sub>り</sub>飛<sub>つ</sub>て

急<sub>ぎ</sub>揚<sub>げ</sub>や<sub>り</sub>香<sub>り</sub>色<sub>し</sub>

催<sub>し</sub>石



泉<sub>の</sub>忠

などの句で、大凡其格好を想見する事が出来るが、甲句は女郎が床に入る前に、天窓へさした

江戸麹町三丁目  
**根本助惣**  
 出<sub>で</sub>若<sub>し</sub>可<sub>し</sub>常<sub>に</sub>見<sub>え</sub>る<sub>べ</sub>し

とある所から推すと、江戸中只一軒しかなかったものと見える、麩<sub>の</sub>焼<sub>の</sub>一種で小麦粉を捏ねて薄く延ばし、餡を包んで焼いたものである。

助總のやうにたゝんだ櫛疊  
 助總にして番頭は繩をかけ

(天) (?)

櫛や笄などを抜取つて疊紙たてがみに挟んで仕舞ふ様、乙句は質屋で典物の衣類などを縛る状を云つたのであらう、『狂詩選』に助總燒始助總燒、極上鹽梅聞四方、先祖由來住居久、家名自與麴町長、とある通り、餘程古くからあつたものらしいが、維新前まで繁昌してゐたと聞くのみで、今は絶えて面影を止めない。

猶参考の爲左に集古會雜誌の記する處を示す、助惣燒は麴のやき又銅羅燒なり助惣の元祖は大木元佐治兵衛といひ慶長元年武州新原村に生れ若年の頃江戸横山村平川村の間に來住し寛永中麴町十丁目南側に麴の燒を始む正保慶安の頃大命によりて餅にも屋號にも助惣の名を冠すとは此店の由來書に記す所三丁目に移りたるも古きことなるべし延寶頃の寫本國町の沙汰にも江戸の名物を記せし中に助三ふのやきの名見えたり享保板江戸砂子に皮薄紙の如くにして箔を裏す麴の燒は卑しきものとす此助惣はうへ方にもめされあちはひすぐれて美なりとあり昔義經の奥州に落ち給ひし時武藏坊辨慶此處に於て負傷の療養をなせしが其出立の際銅羅と手紙を残し行けり其銅羅をもて燒き初めしを以て一名銅羅燒の名ありといへる傳説さへあり江戸に於ける最古き菓子にして此店維新前迄十五代連綿として繼續せしが今は絶えたり。

(一四) 永代團子

花よりも團子永代株になり

(保)

といふ狂句がある、彼の教訓亭作の『英對暖語』といふ人情本はこれを綴つた題號であらうと思はる



無聲氏曰く。永代團子の賣店は、永代橋西詰南側の角は制札場、其西隣の水茶屋一軒を隔て、佐原屋と八幡屋と相並び、各元祖名代永代團子の看板を出せり、佐原屋の商標には本家元祖佐原屋下總椽藤原重長とあり。

(一五) 廣徳寺門前汁粉屋

馬鹿な下戸汁粉がすきで溝へおち

(保)

下谷廣徳寺の門前を<sup>下</sup>上戸が通ると溝へ陥るといふ事があるので。

どうしたもんだ廣徳寺の溝へ<sup>下</sup>下戸

(保)

と云ふ句がある、彼是推想するに其頃門前に有名な汁粉屋があつたやうに思はれるが、屋號其他は未詳である。

今門があくと汁粉を盛つて出し

(明)

此句類句らしけれど不確、只参考の爲に附記しておく。

(一六) 栗餅の曲搗

「守貞漫稿」には「開帳等凡て群集の場所に出て賣る餅を握り、指間に一顆宛都合四個の小餅を出し、六七尺餘の間を隔てたる盆中に投ずること速妙にして、空中を飛ぶ餅常に二三個を絶へず云々とある、又英泉の「魂膽夢輔譚」に栗餅曲春の假聲を模出せる一節がある、参考の爲に附記して見れば「名代くくく、栗くくく、是は先々御評判の曲春、曲切、縁日、開帳、盛り場で元朝から大晦日と商ひます、元祖本元栗餅の曲春、扇丈の御子様方まで御存じうまいくと申すは賣りたいまゝの商人言葉、召上りまして風味で分る、砂糖は太白、小豆は越餡、お恐れながら上々様まで御用で召る、云々」尤も一九の「金草鞋」並に「膝栗毛」には大阪生魂社にあるものを元祖とする趣が書いてあるが、元祖は兎も角江戸にて隨分盛であつたやうであるから茲に挾んで置いたのである。

曲搗は粟で此世をすこす也

(政)

ねらひはづさぬ栗餅の没羽箭

(保)

甲は百人一首の文句取、乙の没羽箭とは水滸傳中の人物投石の名人である。

(一七) 目黒の栗餅と餅花

此二品は目黒の名物として、『江戸砂子』の記す所であるが、餅花とは赤白黄に彩りたる餅を花の如く木の枝につけたるものである、柳句の側では孰れも皆不動を煮出しの女郎買ばかりである。

一夜の榮華粟餅のみやげなり (安)

榮華のうちに粟餅が堅くなり (安)

餅花を二十九日の晝配り (明)

餅花の月越になるふとよきさ (安)

不動の縁日は二十八日で、正五九の三月は特に目黒の書入日であるが、其晩はトウ／＼戻らずに三日目の朝ボンヤリ歸つて来るなどは不届至極である、尤も初めの二句は廬生を臭はした趣向である事は云ふ迄も無い。

しわん坊連の餅花ことづかり (明)

餅花をおれも／＼とことづける (明)

餅花を下戸収集め持つてくる (安)

餅花をことづかつたでにぢられる (安)

女郎買の附合を断つて、土産を託せらるゝなどは氣の利かぬ話しであるが、畢竟拾ひの飯代を

拂ふよりはとの懷算用流石に伊勢屋の息子は別である、だが、折角とゞけて遣れば自分丈歸つてなぜ内の人を連れて歸つて呉れぬと、散々嬪ア達の小言を聞かされるなどは全くうまらない。

餅花を買ひにやらせて飯をくひ (寛)

餅花は承知／＼と若い者 (拾)

餅花はどうでもなると二挺かり (安)

餅花をくひ／＼連をすゝめてる (明)

餅花などはどうでも成るよ、まあ兎も角もと駕にのせて品川へ行き、十匁の飯を盛り立てる内に、妓夫公は合點承知でちやんとお土産の調達をして置くとは、さて／＼調法なことである。

餅花をさげて片手に禿なり (安)

目黒花持つて禿は舟をよび (明)

其時代目黒川に渡場ありしにや、蓋し此二句は品川から女郎を連れての目黒遊びであらう。

餅花をさげて難所へさしかゝり (拾)

餅花の下向東海道をくる (明)

品川へ投げ入れにする目黒花 (明)



東海道の難所は箱根にあらずして品川であるが、態々廻り道をして其難所にさゝかり、肩にした餅花を暫し床の間の花瓶に投さしにして、懐中を絞取らるゝなどは物好きなことである。

餅花を買つて尋ぬる比翼塚 (政)

餅花と柿が四つ手になつたやう (安)

餅花が四つ手の中へ二つ三つ (明)

地下の小紫が品川へ廻りなんしと勧めたか如何かは解らぬが、四ツ手に揺らるゝ以上は、就れ口三ツで飯を食ふ積りと見える、尤も柿の句は九月の目黒詣であらう。

栗餅は犬にくれろと氣がちがひ (拾)

昔目黒不動様の使はしめなりとて境内に多くの犬を養ひありしと聞くが、現に今日でも他社の狛犬コイヌの場所其他所々に犬の石像が、置かれてあるのを見る。

品のいゝ嘘餅花をさげてくる (天)

餅花の散る入相は芝でつき (化)

餅餅と柿高輪をぶうらぶら (天)

餅花の似せと本手を女房見る (安)

おめくくと女房栗餅焼いてくひ (明)

木に餅の成つた嘘ではもう食はず (安)

餅でした花に女房の嵐なり (化)

喰はずばいゝわだまれと栗の餅 (安)

栗餅もトウ／＼最後には犬も喰はぬ焼餅になつたとは面白い面白い。

木に餅の成る程目黒にてすゝめ (天)

雁皮紙のやうな目黒の重ね餅 (政)

目黒餅雁皮紙色にかさね切り (政)

多くの句中、品川と無關係の句は只此三句位であらうか、尤甲句は品川勧誘とも解せらるゝも又お土産みやげ召しませの方ともとれる、乙丙は不明なれども参考として捨つべからざる句として附記して置いたのである、「江戸砂子」に擧げてある四つの目黒名物・餅花、御福の餅、栗餅、川口飴とある中のお福の餅ではあるまいかと思へど全く想像に過ぎぬ。

(一八) 川口屋飴

目黒の餛  
と駒の餛

しるしのあかし

川口屋



菓子 は 舟川口餛 で 名 が 高 し

(政)

前の舟橋屋と川口屋とを対照した縁語結びに過ぎぬ句考である。

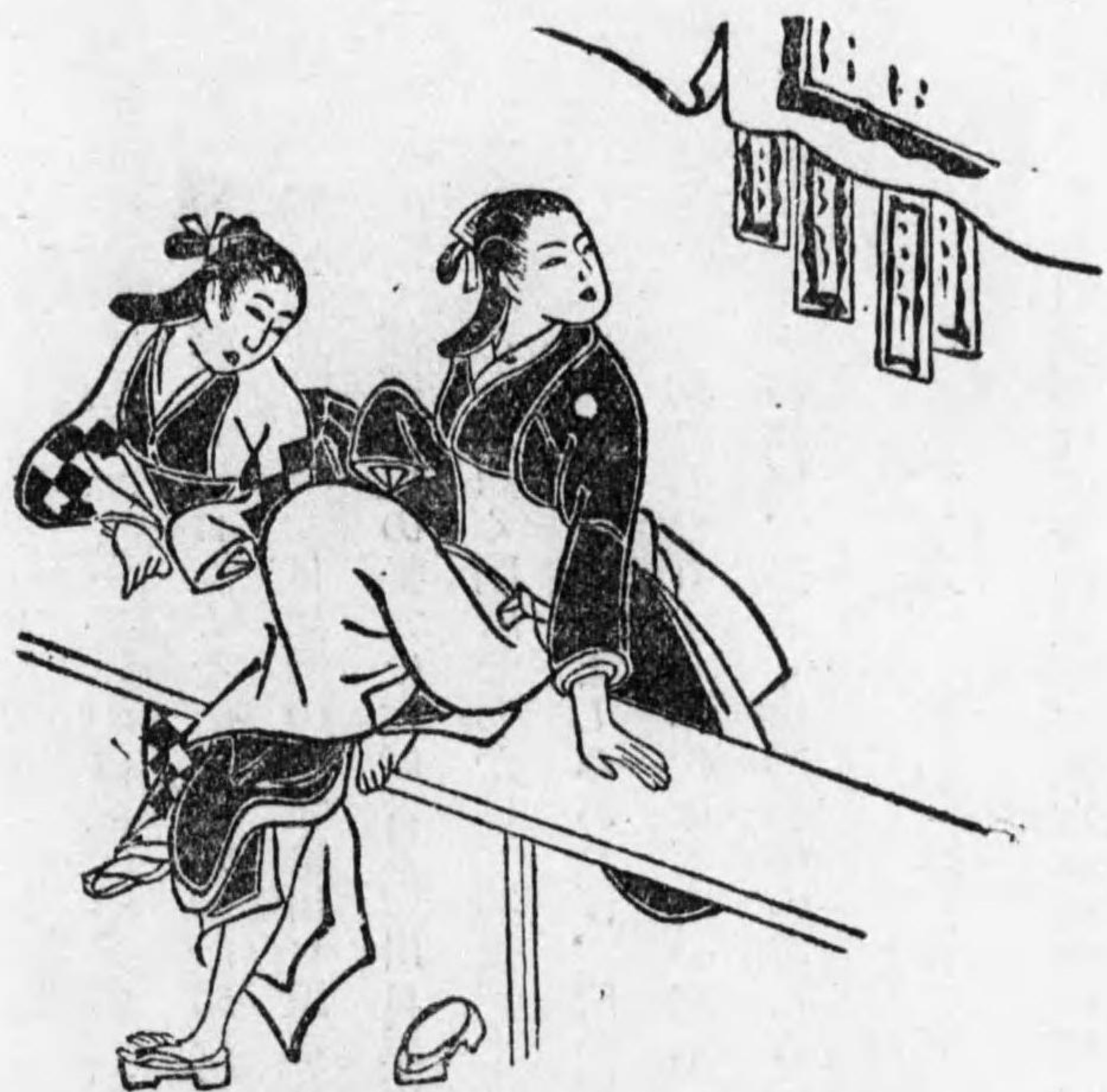
無聲氏曰く。目黒餛の根元は川口屋なりしも、寛延四年版本『江戸總鹿子名所大全』に、

江都餛屋の提元は當所(目黒)川口屋市兵衛といふ者なり近き頃子細ありて此店斷絶すとあるが如く閉店せしかは、其後髭十と渾名されし桐屋同地に移りて名物となれり、此髭十は三官餛屋とよしみあれば、同餛屋の廢業の時其名代を譲り受けて、桐屋陳三官餛と改稱せしなり、其年代は天明の寫本『衣食住の記』に、昔に變らぬ目黒の栗餅陳三官餛とあれば、恐らく寶曆初年の事なるべく、次條参照せらるべし。

(一九) 桐屋三官餛

是亦目黒名物の唐餛屋で、『集古會誌』に掲げてある商標を見ると、桐の紋の下に陳三官と大書し、桐屋治右衛門と割書にしてある、其解説によると、もと芝田町にあつたもので、天和三年の『紫の一本』や享保十七年の『江戸名物鹿子』にも其名が出てゐる趣を記し、猶此商標は目黒の桐屋のであると斷り、何時の頃より目黒の名物となりけんと附加へてある、要するに川口屋といひ桐

# 芝三官館



屋といひ、目黒館の賣店は藪軒あつたものと思はれる。

言譯のおみやを召せと桐屋いひ

そこいらの館だと親仁目が黒し

などの句は、不動參詣に託けて品川に遊び、言譯の材料に館を買つて戻るといふ寸法を素破抜いた穿である。

(二一〇) 切通しの猿館

今日にても本郷切通し、現今の區役所前にある館屋にて、館袋を提げた猿人形の看板が出されてゐる。

猿館は山王下と知つたふり

枳殻を廻つて猿館は切通し

猿館なら山王社の下で賣つてる筈、との知つた振り、滿更無理でもあるまじ、又乙句は其附近に例の春日局にて有名なる麟祥院(俗に枳殻寺)があるので四國を廻つて猿となるといふ俚諺をもちつた趣向に過ぎぬ。

(明)

(天)

(政)

(保)



(一一) 淀橋辨慶餅

今日も猶存し、淀町橋西の南側にありて、店頭に甲冑に身を固めたる辨慶の木像が飾られてる。

いら高珠數で辨慶の飴を買ひ

(保)

辨慶が持ちしと云ふ苛高珠數を臭はして、お土産を買ふ堀の内の御祖帥様詣。

薙刀草履で辨慶の飴を下げ  
新宿へ来て辨慶はだらけ出し

(政)

(政)

甲は只薙刀と辨慶との結び、乙は新宿の飯盛に引つかゝつて折角のお土産も、うぬがからだ身體と共  
にでれ〜と解けて仕舞つたとの意。

(一二) 堀江町焼芋

堀江町風静つて薩摩芋  
堀江町團扇と見せて薩摩芋  
薩摩から奈良へ飛越す堀江町  
夏澁く冬甘くなる堀江町

(明)

(天)

(化)

(安)

日本橋堀江町は冬の間は焼芋の名物を買ひ、夏に成れば團扇の製造に轉業したのである、猶第八  
章参照のこと。

(一三) 翁煎餅

照降町の角に在つて、「賀久屋壽々免」には羽左衛門の名によりて開店せりとある、「狂詩選」に砂糖上品味尤輕、進物年中客自榮、縦有<sup>ニ</sup>結構干菓子、如<sup>レ</sup>此煎餅少<sup>ニ</sup>江城、とある所から見れば、専ら贈答の進物などに使はれたものらしい。

○照降にとんちやくせぬは煎餅屋

(天)

○煎餅屋ばかり照降なしに賣れ

(寛)

の句は、此翁屋を呼んだものである事は明かである、一體此附近は傘屋と雪駄屋とが多くあつた所で二つ共晴雨によつて其賣高が違ふが、此見世のみは更に天氣に關係がないとの意を籠めたものである。

(二四) 梅ヶ枝煎餅

梅ヶ枝煎餅ばら〜とまいてやり

(政)

と云ふ無間の鐘の手洗鉢に言寄せた一句を見出したのみで其發賣元等一切不明である、小判形の煎餅なりしと教へてくれた古老あれども確とした依所はない。

(二五) 姿見煎餅

大谷徳治俳名馬十が瀬戸物町にて賣出したと賀久屋壽々免にある。

伊吾の役其姿見が目に残り

(政)

其いごは姿見程の仕手は無し

(保)

の二句は其役者を詠みたる句にて煎餅を詠みたるものではないけれど、只其名目の起源を説明する爲に挟み置いたのである、「劇場訓蒙圖繪」に馬十のことを姿見と云ふとある、されば馬十が始めたから姿見煎餅と云ひしか姿見煎餅を始めたから馬十を姿見と云ひしか其點は不明である、只識者の叱正に任せておく、但し馬十は忠臣藏にて番内と伊吾役とは他の追従を許さぬ專賣物であつたと聞く。

(二六) 雷おこし

浅草観音仲見世には今に雷おこしの看板を見るが、元祖は丁屋(一説に虎屋とも云ふ)にして浅草並木町に始めて開業し、数年の後同家斷絶したるも、今日猶その屋號を冒せるもの數軒ありて年の市、四萬六千日、開帳縁日等に來り浅草名物雷おこし召しませと呼び商へりと、一風俗畫報』の一節にあるを見た。

雷おこし 光屋の近所也

(政)

雷と光とを結んだ純狂句であるが光屋とは何をする家か不明である。

(二七) 御所お輿



一書に天明時代には最も盛にして天保代には既に廢絶したるが如しとある。(書名逸)

かんでらは衛士のたく火か御所おこし

(政)

禁裏様あれを召すよと御所おこし

(化)

衛士、禁裏など無理に御所の縁語を結び附けた狂句に過ぎぬ。

(二八)・浅草 輕燒

誓願寺門前茗荷屋九兵衛、京都丸山の製を摸して燒始めたもので、昔は輕しといふ語を緣起に専ら瘡瘡の見舞品に使はれたとある。

輕燒を買ひに他宗の通りぬけ

(天)

の句は、眞宗ならぬ宗徒も本願寺の表門から這入つて、裏門前にある誓願寺に抜けて、輕燒を買ふとの意であらう。

大手は甘酒 搦手は輕燒

(寛)

は同じく本願寺の表門と裏門とを云つた句であるが、序に此處の名物甘酒を挾んで置く事にしよう。



(二九) 三國一甘酒

は本願寺前に在つて、文政代には三河屋、伊勢屋、大塚と三軒並んだ浅草名物の一であるが。

門跡前の居酒屋へ下戸這入り

(化)

肩衣と帽子甘酒のんでゐる

(政)

などの句がある、尤もこの方は十一月の御講に参つた肩衣を着た善男と、角隠を被た善女とを詠んだ句であらう。



(三〇) 竹村の最中

五丁へは竹二丁へは虎を積み  
町で竹芝居で虎を下戸くらひ  
兄は竹妹は虎を喰つてゐる  
千兩の地には餅屋も竹に虎

(政)

(政)

(化)

(政)

などは、孰れも竹に虎を配して、吉原と芝居町とを云つた句であるが、此竹村伊勢大掾は仲の町の菓子司であつて、『狂詩選』にも色白最中一片月、巻煎餅品尤嘉、暑寒年玉又時候、茶屋携行得意家、とある如く、最中と巻煎餅とは特に名物として持囃されたものであるが、『守貞漫稿』中に掲げある吉原名物中に最中の月松屋忠次郎とあり参考迄に附記す。

堅卷のふみ竹村の折に添へ (保)

吉原は竹の中から月が出る (化)

などの句になると、大いに吉原情調を發揮してゐる。

晦日にも息子最中の月を見る (化)

竹村は星の座敷へ月を出し (政)

武藏屋の客へ最中の月を出し (化)

竹村は最中の月に赤團子 (化)

星は入山形に二ツ星の花魁であるが、武藏屋は江戸二の交り店で、唯月の道具に引出した丈の趣向であらう、さて赤團子とは艾の事であるが、竹村にて又そんな品物をも賣つたものと見ゆ。

大まかな所だに菓子屋伊勢とつけ (化)

竹村伊勢はしわくない所に住み (政)

の二句は同想同型で、金を撒き棄てる所に、伊勢印(吝嗇)と付けたのは、少々妙だといふ丈の事に過ぎない。

子を捨てる藪に竹村うつてつけ (化)

竹村の近所にはいゝ伏見町 (化)

子を捨てる藪とは吉原のこと、京都の伏見は竹の産地として有名である。

菓子屋には月女郎に旭なり (化)

竹村は最中丸屋は旭なり (化)

共に日月の結びであるが、京町二丁目の旭丸屋には、當時旭如來の本尊が安置されてゐたからである。

山屋から朧竹村からは月 (化)

の句は、月に朧を結んだ趣向に過ぎぬが、朧とは山屋の朧豆腐の事である。(其條参照)

(三二) 金澤の菓子



金澤丹後大椽は上野山下にありし菓子屋にて。

皐月にしめる有平の丹後稿

(保)

丹後からねぢれて見える袴腰

(政)

の二句は共に丹後を縞に見立てたる句案である、袴腰とは黒門の両方に石垣を築上げたる凸堤其先端が梯形をなして袴の腰板に似たるより起りたる名である。

蝶の來て舞ふ金澤が見世

(安)

店頭に飾立て、ある菓子が花の如く奇麗であるとの意か、不明である。

(三二) 舟橋屋羊羹

舟橋屋は深川佐賀町にあつた名代の菓子屋であるが、例の『狂詩選』には本家久住深川岸、菓子羊羹天下横、縦有同名同店在、舟橋文字自然明、と褒めてゐる。

評判も今汐先の舟橋屋

(化)

蒸籠も乗合でやる舟橋屋

(政)

新橋の下をくぐると舟橋屋

(政)

舟橋を渡つて來たと菓子杜氏

(政)

舟橋を治郎左衛門へ嫁捧げ

(保)

別莊へ釜日をききに舟橋屋

(政)

深いから浅いへかゝる舟橋屋

(政)

など、所謂化政度の狂句で大分賑かであるが、新橋とは新大橋の異稱で、菓子杜氏とは菓子師の事であらう、舟橋屋に居たと云へば随分幅が利いたものと思はれる、又治郎左衛門は古代雜の名、釜日は茶の湯の立つ日である、最後の句によると淺草に分店があつたやうに思はれるので古老に糺すと、雷門の脇に舟橋屋といふ菓子屋があつたとの垂示をかたじけなうした。

無聲氏曰く。 船橋屋織江著『菓子話船橋』に、文化の初め僕が深川佐賀町に店を開きし頃

とあれば、其店の創業年代を知るべく、家藏の商標に同店と頭書して、四谷傳馬町二丁

目船橋亭、淺草雷門内船橋屋織江とあり。

織江が練を口取の四疊半

(保)

是は茶席に於ける舟船羊羹であるが、方外道人の『茶菓詩』に山本山、船橋練羊羹、一碗喰一切、一棹土瓶傾、(以下略)とある通り、織江が羊羹と山本山の茶とは、茶人に取つては缺

ぐことの出来なかつたものと推せらるゝ。

(三三三) 山本屋山本山

山本屋嘉兵衛は日本橋通二丁目にある茶舗であるが、江戸時代から頗る有名なるものにて、狂詩選に買者立並客如し市、番頭手代少無閑、一時賣出三千斤、多是自園山本山、とあるのを見ても其繁昌の様相が推想せらるゝ。

山本山で金時を茶受にし (政)

山本は茶にされないと越後勢 (保)

彦七と勘助うまい梅びしほ (政)

甲は山姥の山又山を綴つて小豆餡の金時に配した趣向、乙は山本に勘助を利かせた句考、丙の彦七は大森を寓したる句案にて大森梅屋敷に梅びしほの名物がある。

(三四) 池端香煎

下谷池端に酒袋、酒悦、酒好と呼ばれた三軒の香煎茶屋があつた、「狂詩選」に祇園不<sub>レ</sub>及香煎

味、下谷仲町酒袋方、買得家々皆便利、客來先出一杯湯、とあるは其内の酒袋を詠みたるものなるが孰れも略同様であつたと思はる、此詩の上から推想すれば往いて賞翫するばかりでなく又買ひ來つて家庭用ともしたるものらしい。

越王を飲みを上野の茶屋へより (化)

越王を粉にして嚙ぐ池の端 (化)

牛王は熊野越王は池の端 (政)

越王は勾踐、勾踐は香煎、牛王は吳王、かう立つつけの駄洒落には夫差くせぬ譯にはゆかぬ、序に今一つ。

悦の香煎鹽梅をなめて知り (保)

悦は酒悦の悦にて越の秀句であるが、越王勾踐が捕はれて癡病に惱める吳王夫差の東西をなめさせられたことを臭はした趣向である。

冥途は知らず香煎は池の端 (化)

香煎と黄泉の秀句。

然るに香煎は仲町の酒好き (化)

散込んだ花香煎をくみ直し

(化)

甲は酒好、乙は花下毛氈を掛けたる掛床に休みたる客へ、美しい姉さんが香煎を汲んだ茶碗を盆にのせて差出す光景が、躍如として現はれてゐる。

(三五) 更紗梅

「江戸商品獨案内」に出せる看板には、中央に根本元祖さらさ梅所とし、右に南京流、左に田麩類とあり、本店は江戸山下御門通南鍋町一丁目漬物類店(勸)三河屋正種製とある。

ちりめん紫蘇を切込んだ更紗梅

(保)

句面から推せば梅の紫蘇漬の一種かと思はる。

箆筒から縮緬雑魚や更紗梅

(政)

縮緬更紗など呉服物の名寄せに、部屋持女郎の箆筒を詠んだ句である。

(三六) 甘露梅

吉原名物の一にて、「守貞漫稿」には水道尻山口屋半四郎店にて賣るとある、併し又各樓にても

製したるものと見えて、春水の「梅見舟」中に、毎年五月中旬より廓内茶屋一同甘露梅を製して來年正月の年玉に用ふ、其製法の日には見板の唄女など來り手傳ふ趣が書いてある。

甘露梅女藝者の加役なり

(化)

爪紅程に梅卷の藝者の手

(保)

甘露梅へも山形の星下り

(寛)

此句によれば、花魁<sup>はなご</sup>ども慰半分<sup>なぐさ</sup>に内緒へ來て、手傳でもしたものらしくも思はる。

梅卷の前垂花の暖簾也

(政)

ちりめんにくるまつてゐる甘露梅

(保)

縮緬は紫蘇の葉の見立。

菅原が所から來たと甘露梅

(化)

長太夫唇に添へて甘露梅

(政)

甲は菅原太夫を梅にした趣向、乙の長太夫は其名の似たるより伊勢の御師に擬した句案である。

晴れたこと内儀へ向けて甘露梅

(安)

さううまく女房は食はぬ甘露梅

(化)

やきながら女房のたべる甘露梅

(天)

亭主の馴染女郎から、甘露梅の遺物と来ては、御内儀の胸に痞へるのも御尤である。

(三七) 無極庵蕎麥

下谷の廣小路にあつて、『狂詩選』に池砌樓高無極庵、近來出店在于南、大平一碗新蕎麥、開蓋自然香氣含、とあるは即ちそれである、柳句の側では。

中直り無極を借りて手打也

(政)

打音もこんとんとして無極庵

(政)

甲句の中直りは花見の喧嘩にや、乙は只混沌として極なしと云ふ洒落でもあらう。

(三八) 玉屋蕎麥

これは上野山下車坂邊の角にあつた蕎麥屋であるが。

お職は花巻山下の角玉屋

(政)

釜前の炎と見える角玉屋

(保)

などの句がある、所が吉原江戸一に角玉屋と云ふ大籠があつて、門口の暖簾に火炎玉を染出してあつたので、人呼んで火焰玉屋と稱したといふ、されば甲句は蕎麥の花巻をお職女郎の源氏名を利かせて、吉原の玉屋に擬した趣向、乙句は其反對に暖簾の火焰玉を、蕎麥屋の釜前に見立てた結構であらう。

御縁日敷初程にかつぎ込み

(化)

兩太師の御縁日に、多く蕎麥の賣れることを角玉屋の敷初に言掛けた句かと思はる、但し吉原にて蒲團の敷初には、二階一同に蕎麥を振舞ふと云ふ慣例があつたのである。

(三九) 稻荷蕎麥

小石川傳通院の側に、三日月上人によつて奉祀されたと云ひ傳へらるゝ澤藏司稻荷といふ祠があつて、其前に三百年から續いてゐる稻荷蕎麥といふ老舗があつたといふ。柳句に

澤藏司天麩羅蕎麥がお氣に入り

(政)

とあるが、天麩羅の嫌ひな狐のあらう筈がないから、特に澤藏司と斷つてある以上、此句は其

蕎麥屋を臭はしたものと推斷したのである。

(四〇) 團子坂藪蕎麥

『風俗畫報』の記する所によれば、林泉の幽邃なる、眺望の絶佳なる、府内多く類を見ず、汁味は此家の祕傳として主人の外傳授せず、明治三十九年に閉店せしは惜しむべしとある。

團子より坂に名高き手打蕎麥

(政)

藪と笹とで名の高い蕎麥餛飩

(政)

笹屋餛飩後條參考。

(四一) 道光庵蕎麥

道光庵草をなめたい顔ばかり

(拾)

湯のわきさうな庵にて蕎麥を喰

(保)

道光庵人柄のいゝ買ひぐらひ

(明)

道光庵寺役で二日とつばづし

(化)

一の句は腹一杯蕎麥を喰つたから、蛇の嘗める草を嘗めたら人間が溶けて、蕎麥丈残つたといふ咄からでも思ひついて、其草を嘗めたいと云ふ事か、二の句は云ふ迄もなく道光と銅壺との洒落、最後の句は恐らく寺役の爲に蕎麥が打てず、二日儲け損ねたといふ意かと思へど不明、道光庵は門跡あと萬屋のところなりと云ふ、猶「江戸から東京へ」に詳説あれば借りて補記することにする、道光庵は芝崎町一心山稱光院と稱する寺内にありしが今はなし、明暦の頃の庵主蕎麥切の上手にて、好事の賽者所望すれば打つて供した、俗に蕎麥切寺と稱したり云々。

道光庵寺號があらば深大寺

(安)

只夫丈の句であるが、深大寺は多摩川の畔、調布町の少しく北にありて、同じく蕎麥切の名物がある、江戸から遠からざる所であれば序に茲に挟んでおくことにする。

(四二) 深大寺蕎麥

一續江戸砂子』には江戸より七里、中野の先、當所の蕎麥は潔白にしてすぐれ、軽く好味なりとある。

棒の手を馳走に見せる深大寺

(寛)

深大寺棒の上手を客に見せ

(化)

深大寺とちめん棒で馳走する

(化)

深大寺直に打つのが馳走なり

(保)

などの句より推解すれば、矢張り道光庵式に客の求に應じて打つて供したものでらしく思はる。

(四三) 正直蕎麥

『東京名所圖會』の記する所によれば、本所中の郷の住人、勘左衛門なる者、寛永の頃淺草寺内に葦簀張をなし、戸板の上に蕎麥を黒椀に盛りて鬻ぐ、其價廉にして此親父極めて正直者で、た爲に、正直蕎麥の名を得て大に繁昌し、後馬道五丁目に移りて斷絶し近古山田勘左衛門の所有となりその娘ふじなる者引續營業せり云々とある、『俳諧種おろし』に、安永十一年の流行物を記せるうちに、正直蕎麥は馬道と駒形と並記してある、さては其頃は二軒ありしと思はる、又春水の『梅見舟』中に正直蕎麥の所に大榎があつたので、その蕎麥屋を單に榎木と呼んだやうなことが書いてある。

正直は四つ手萬八舟で見

(化)

正直蕎麥屋は四手駕の中から見、柳橋の萬八樓は猪牙舟の上から見るとの意なるが、一面萬八とは正直の反對の嘘と云ふことである。

正直のそばから見える嘘の家根

(化)

正直のそばで息子をだまして

(化)

の二句は、共に蕎麥と側との秀句で、嘘の家根とは云ふ迄もなく天水桶の上げてある家根であらう、其家根を見ながらみすく歸られるものかと、生産な息子を誘惑するなどは、實に怪しからぬ悪玉である。

(四四) 釣瓶蕎麥

あの四つ手一分しめたと釣瓶蕎麥

(天)

乘着けは釣瓶蕎麥あたりでおろし

(安)

此二句の上から推想するに、五十間大門外にありたるものらしく思はる、大門は乗打禁制にて門外にて駕を下りたるものである、尤一分と云ふ駕代は大雪の日若くは特別大急ぎの場合であつたのである。

はやくの夜具を釣瓶でおつぶさぎ

(安)

前に云へる敷初蕎麥である。

(四五) 翁 蕎 麥

深川熊井町にあつて、『狂詩選』に白髪素線其號翁、下戸上戸得意同、從教ニ世間蕎麥衆、一碗喰得急爲通、とある所から見ると、餘程蕎麥通に持囃されたものと思はれる。

めん箱の澤山にある翁そば

(政)

後ろ合せて食つてゐる翁そば

(政)

翁から連立つて行く櫓下

(化)

甲は面箱と麵箱とを秀句に翁を結び、乙は「木會殿と背中合せの寒さかな」といふ義仲寺の翁の碑に利かせた趣向、丙は三番叟と芝居櫓と言掛けて、蕎麥で一杯景氣をつけた上、深川櫓下の女郎買に押出すといふのである。

(四六) 新川 狸々庵

狸々の白髪翁のそばで食ひ

(政)

の翁は前項の蕎麥屋なるべく、狸々庵は新川にあり、新川は酒問屋の多き所なれば。

新川に狸々庵はうつつつけ

(政)

と云ふ句がある、「酒見世の軒を並らべし新川に狸々庵と云へる蕎麥見世」と云へる狂歌は此句と殆んど同義である。

新川の狸々庵は白髪なり

(保)

新酒配りに狸々の柿衣連

(政)

最後の句によれば酒屋にて蕎麥屋を兼業したらしくも思はるれど、俄には断定し難い、柿衣連とは酒屋の仲仕小僧等は凡て柿色の衣類を着る習慣であつたから云つた語であらう。

(四七) 坊主 蕎 麥

坊主そば同明町の者に食はせ

(政)

坊主蕎麥柳橋にありと幕末頃の名物番附中にある、趣向は坊主と同明と縁語を結んだ丈の狂句にて、者とは藝者の通語である、もと同明町には藝者居たりと聞く。

## (四八) 小倉蕎麥

是亦不明、其代價を字餘りの和歌に云ひかけたる左の一句を見出した丈である。  
三十二文字で名の高い小倉蕎麥 (政)

## (四九) 福山蕎麥

福山は樂屋へ粗相かつぎ込み (化)  
舞臺の笑三階へ福來る (化)

役者が舞臺で臺詞を間違へたり忘れたり、總て縮尻つた場合には、其罰として樂屋中へ蕎麥の振舞をなす事、芝居道の慣行法であるが、福山は例の助六狂言にも出るので、殊に能く知れ渡つた芝居町の蕎麥屋である。

間のはるい役者蕎麥屋の一旦那 (化)  
一言絶句樂屋中蕎麥だらけ (政)  
臺詞のつなぎのびたのが蕎麥になり (政)

つなぎ、のび、など蕎麥の縁語を結んだ丈の狂句。

村境福山むかし木戸の側 (保)

福山はどつち最負もならぬ也 (明)

福山は中村座と市村座との間にあつたので、どちらも大事な得意先である。

福山はみんなもまれた人ばかり (寶)

福山へぶたれたやうな人ばかり (明)

切落などにて押合ひへし合ひ、ひどい目をした見物連中が、閉場て歸りに立寄るとの意かと思はる。

福山はちとあやふやの傘も貸し (寶)

上等な芝居茶屋と違つて、高が蕎麥屋、俄雨に困つてゐる得意客へ紺蛇の目と云ふ譯には參らぬが、夫でも大黒傘が破れ傘位は貸すとの義かとも思へど、確言は出来ぬ。

## (五〇) 笹屋 餛飩

其本店は行徳にありて一九の「金草鞋」にも「若竹の笹屋といへど名物はのびる間のなきうど



「蕎麥也」と云ふ狂歌を添へてあるが一書に本所か深川邊に其出見世ありたりとあるを見たるも其書を逸して不明である。

音のない瀧は笹屋の門にあり (政)  
 笹屋が軒に繋ぐ遠乗り (安)  
 紅葉より笹屋をほめるげびた奴 (天)  
 うどんより外にはしやれの無い所 (安)  
 うどん屋の見世にびつこや草鞋くひ (?)

初句を除くの外は眞間への途中、行徳の饅頭屋であらうと思はる。

(五一) 壺屋 泡雪

壺屋と云ふ泡雪豆腐は葺屋町にありて芝居客を得意に大變繁昌したものらしい、天保十三年に二座が淺草の猿若町に移轉したと同時に廢業したと見えて、「歌舞伎年代記續篇一」に「二階だて思ふ壺屋が商ひの手筈もむざと消ゆる泡雪」と云ふ狂歌が載せてある。

伊勢屋連、思ふ壺屋で芝居也 (政)

伊勢屋の芝居壺屋ではぞを入れ (政)

切落などに押合つてゐる沓齋家連が、壺屋の安辨當を食つて居るとならんが、臍を入れるとは壺穴へ埋木などすること、茲では空腹に食物を詰込むの意であらう。

百ばかり何のこつだと壺屋云ひ (明)  
 泡雪が邪魔と辨當賣が云ひ (安)  
 二丁町せはしい飯を壺で食ひ (化)  
 百棧敷福の雪のともめるなり (安)

一人前百文つゝの向棧敷の客が辨當は福山にしよう、いや泡雪がいゝと争つてゐるとは下卑た話である。

並大名配膳は壺屋なり (化)

此句によれば必しも見物人ばかりでなく、下等な役者なども、壺屋の豆腐料理位で晝飯を間に合はせたものと思はる。

胴取のやうな泡雪家名なり (安)

博奕語の胴取と壺とを利かせた句構

## (五二) 兩國泡雪

泡雪とは餡掛け豆腐の事にて、化政代の書に依れば芝居町だの湯島だの其外方々に澤山あつたが兩國回向院の邊のが名物として最も著名であつたらしく思はる、「總鹿子増補」に「兩國橋東詰日野屋東次郎、享保の初め、淺草並木町西側にてはじめて製したり」とあるによれば、根原は可なり古いものにて最初は淺草にあつたものと推せらる。

泡雪は他國にあるが繁昌し (明)

他國は向兩國即ち下總の意。

下總はおかべあんもは武藏也 (安)

橋東の泡雪と橋西の幾世餅とを對稱したる句であらう。

其あした幾世泡雪賣り切れる (化)

其あしたとは元祿十五年十二月十五日の朝にて、引上げの義士を見んとて兩國附近押すなくの雜沓で思はぬ金儲けをしたとの意。

打出しの頃泡雪は葛をねり (寶)

## (五三) 笹の雪

下總の雪をくひ消す角力客 (化)  
角力くづれが泡雪に人の山 (政)

三句共に回向院の本場所であるが句面によれば、寶曆代には既に茲に移つて居たものらしく思はる。

泡雪は無縁の人のよりどころ (化)

回向院は明暦の大火にて惨死せし數萬人の爲に建立されたる無縁寺なれば、年中其人等の供養の爲に參詣する人々にて繁昌してゐるとの意である。

泡雪で又二三本さしをなげ (安)

泡雪で消えも入りたき人にあひ (政)

緡錢二三本とは二三百文の散財であらうが、消えも入りたきは例の雪の縁語、ばつたり寺詣りの伯父と出ツ會し、朝つばらから何處へ行つた、ナニ不動様へ參つたと御信心な事だのう、などと皮肉られて朝歸の奴さん穴あらば這入りたからふ。

是れ亦豆腐料理にて根岸の名物である、何年代のものか書名を逸したれば不明であるが兎にも角にも吉原往き復りの客によりて繁昌したことは多くの句面に髣髴してゐる。



吉原雀ちよつくくと笹の雪

(政)

一杯は女房もくつた笹の雪

(政)

吉原雀とは吉原入りびたりの定連、句案は雀、チヨツク、笹の縁語結び、乙句「ナニ、町な  
ものか友達と出會つて笹の雪で一杯やつて居て遅くなつたのさ。」

盛換えの茶碗もつもる笹の雪

(政)

此頃は根笹の雪が所々にふり

(政)

句面により推考すれば、文政頃には笹の雪といふ豆腐料理屋が方々に出来たらしく思はる。

曉傘を借りて来て笹の雪

(化)

句義は吉原から曉傘を借りて、歸り路に笹の雪に立寄つて一杯やるといふ丈の事であるが、その曉傘といふ事が半知半解の語である、されば私が取調べた凡てを披瀝して参考に供し、大方の定解を乞はんと思ふのである、「誹諧通言」に「元吉原の時分より用ゐるし故事、元祿の頃其角が發句より初まる」とある、そこで其發句を詮索したるに、其角の「類柑文集」にあかつき傘と題し「剡溪の雪に徘徊待乳山の時雨に徊りて、心ありけなるを、妻なく子なかりし時の樂しみとせしかば、閨中の力としたる爛さましこそ、胸いたかりし其の吟三。「曉の反吐は隣りか時鳥」「夜こそ聞け穢多が太鼓ほとぎす」「時鳥曉傘を買はせけり」傘賣りの曉ばかり来るものは、云々とあり、文義少しく解し難き點あるも曉傘といふことは「時鳥曉傘を買はせけり」といふ其角の句に起因せる事は疑ないやうである、又並木町の落雁店の引札を京傳が書いた文に、淺草の名物を並らべてあるが其中に「その名高尾の紅葉傘、曉傘に助六下駄、云々」とあるもどんな傘にや不

明である、某先輩は藏前の通人曉雨好みの傘と垂示せられたれども出典を聞かぬうちは俄かには信じ兼ねるのである、猶此句とは無關係なれども「曉の反吐を經帥屋丸洗ひ(天保)」といふ句は久しく難解の句であつたが、前項の研究に依りて圖らずも解釋し得たのである、即ち「曉の反吐は隣りか時鳥」と書いた其角直筆の色紙か短冊かを表具屋が洗ふて煤を抜いたとの意にて、此三句は随分名高いものであると思はる、筆の序に記したのである。

(五四) 眞崎の田樂

眞崎稻荷の田樂、東都の一名物たるを失はず、同地に田樂屋の出來たるは實歴代なるべく、甲子屋、若松屋、川口屋、玉屋、稻屋、仙石屋、きり屋、八田屋など最も知られてゐる、尤も田樂屋は向島などを初めとして各所に散在し、必ずしも眞崎のみには限らざりしこと勿論であるが、吉原を中心として詠まれたる田樂の句の多くは、こゝらのものとして大抵差支へはないやうである、茲には明かに眞崎と限定し得べき少數の句を例擧するに止めておく。

眞崎で焼く田樂も狐色

(政)

田樂をくふうち眉毛數へられ

(明)

眞崎はぢやうせき味噌をつけるとこ

(明)

眞崎の田樂味噌のつけはじめ

(化)

眞崎は息子を化かす色に焼き

(政)

田樂でかへるがほんの信者也

(明)

田樂を喰つた切りで我家に歸るのは本當の稻荷信心者であるが、大抵は焼けた狐色に誑たがらされて吉原に廻はり、とう／＼最後に味噌を附けるやうなことになるのである。

田樂ぢや飲めぬが事のはじめ也

(明)

田樂で飲むうち飛んだ智恵が出る

(安)

相談が出來て田樂せつくなり

(明)

行かうかと田樂串で齒をせしり

(明)

田樂の途中からやむおもしろさ

(明)

田樂を食はせて置いて吞込ませ

(安)

田樂を飛越して出てこりやどこへ

(天)

田樂で崩す小判はあてがあり

(天)

などいづれ北國征伐の作戰計畫である。

田樂と云へば親父へ體がよし (安)

眞崎は仰向く度に二文づゝ (明)

田樂のなぐれめらさと遣手云ひ (天)

田樂でしやれる向うはカアンカン (安)

田樂は一切レ二文、カアンカンは梅柳山木母寺の常念佛の鉦の音。

ふところは田樂ぎりの仕度なり (安)

淺ましい奴等田樂食ふと逃げ (安)

懷中が淋しいなど、みすく、天水桶のある敵國の屋根を目の前に見ながら、おめく、と後を向けて引返へすなどは、云ひ甲斐なき淺ましい奴等とは淺ましい了管。

まだお早いと甲子屋知つたふり (安)

甲子屋是から先が傳授事 (寶)

傳授事とは、天機洩らすべからず是から先の戰略はおれが方寸の胸にあり、だまつておれに附いてさへ來ればいゝ、と云つたやうな場合であらう。

堀で見た藝者見かける甲子屋 (安)

読んで句面の通り。

田樂の足手まとひは女連レ (明)

田樂で夫婦別れる美しさ (明)

どこへなり時<sup>とき</sup>く必要を感じることに切なる場合に、意中を察した女房が私共は是から向島の方へでも廻つて歸りますから、お前様方は御遠慮なしにお先に御出で遊ばしませとは美しい出方であるとの義かと思ふ、江戸時代の女の心意氣なるものは現代人の頭腦ではちと解し兼ねる點がある。

取舵<sup>とりかぢ</sup>で田樂まではやりたてず (安)

田樂の味噌をふきく堀さへし (明)

柳橋から取舵で眞崎まで漕上せる舟も、眞崎で喰つた田樂の口を拭きながら面舵<sup>おもかぢ</sup>で下る船も、聖天の下あたりに差かゝると俄かに風が變つて山谷堀へ吹附けらるゝとの義である。

眞崎の田樂串で封を切り (寶)

お歸りには、せしくお廻りくだされ度候とある、かしくの針に釣上げられて行つて見れば。

真崎は賑ふかへと寄りかゝり  
と来るから面白い、よし／＼翌日は連れて行つてやらう。

(?)

切手を見せて田樂を食ひに行き

(寛)

切手の入らぬ田樂はまづいな

(安)

春先など陽氣に催されて女郎や藝者を連れ、真崎邊に野掛をする客もあつたのであるが、女郎は大門を出るには四郎兵衛の會所に切手を示さねば通行を免るされぬ成規であつたのである。

真崎の群レ田樂の字にあたり

(安)

田樂は田で樂むの訓があり

(安)

臨時の物入傾城に田樂

(天)

田樂が一本二百程につき

(明)

(五五) 豊島屋田樂

田樂も鎌倉河岸は地者也

(安)

真崎で豊島屋をいふげびたこと

(安)

神田鎌倉河岸の豊島屋は酒を賣るのが主で、其客を引く爲に田樂をも賣つたので、安くて大きいことは無類であつたとある。されば苟くも通客たるものが夫と比べて、真崎の高いの小さいのと吝嗇な事を云ふのは下卑てゐるとの意である。

(五六) 山屋の豆腐

山城と武藏の間に豆腐見世

(天)

とある通り、吉原京町と江戸町の間にある揚屋町山屋市左衛門にて賣出せる豆腐にて、風味極めて宜しく、當時吉原名物の一として粹人通客に稱美せられたものである。

新吉原二丁目  
御膳色豆腐  
山屋市左衛

夜櫻に臍豆腐で飲めるなり (化)

場所柄で豆腐屋までが山印 (化)

山屋でも舟で高雄を切りおとし (政)

山屋だと先から伽羅を知つてゐる (化)

などの句がある。山印は細見の印、終りの二句は仙臺候を臭はした句作で、一は高雄を紅葉豆腐に利かせ、一は山谷の豆腐屋は伽羅の下駄を知らなんだが、山屋なら竹に雀は見知越であるから、粗末にはせなかつたらうとの理屈である。

銀世界山屋の豆腐賣り切れる (化)

新造の客は山屋のこといふ (安)

新造の客へ山屋の平をつけ (化)

甲は雪の爲に湯豆腐熱爛のお直し、乙丙は入歯のお客の事であるが、新造對老人の句は、柳界での大呼物である。

山屋の豆腐兩親の齒に合はず (政)

新造に現を抜かす様な柔かな御隠居の口には至極適しても、ちと苦<sup>にが</sup>りの勝つた堅い親父には大

不向き、第一息子共が若い癖に此豆腐を喰ひたがるのが癢に觸つて成らぬ。

(五七) 小川町御用豆腐

俎板橋近くにありて、お城又は上野などへ御用の豆腐を納めたものかと思はる、句が二三見出さるる。

俎板は豆腐長屋へ小半丁 (政)

柔かな御意で豆腐の一長屋 (政)

豆腐にはかすがひを打つ小川町 (政)

豆腐にもかすがひ山の御用札 (政)

壁に耳豆腐長屋と下女おもひ (化)

など、皆俚諺に言掛け或は縁語を結びたる趣向の句である

(五八) 阿満がすし

「狂詩選」には上横町新道紀伊國屋とし、何歳初開鮮屋店、連綿數代市中鳴、海苔玉子鹽梅妙、知

是女房阿滿情、とあるより見れば、おまんと云ふ女房が作り初めたものかと思はる、「江戸から東京へ」に、おまんは路考に似てゐたと記してある、尤も「江戸塵拾」には恠うある「京橋と中橋との間に賣る名物なり、江戸の子女等夕日の雲に映じ紅なるを見て、京橋中橋お満が紅と唄ふ、此たはむれを取りて名附く、寶曆の初鮓屋長兵衛之をばじむ」と参考迄に附記す。

鳥飼も鮓もおまんは悪くなし

(政)

餅屋かと聞けばおまんは鮓屋也

(?)

などの狂句があるが鳥飼は本町三丁目の和泉饅頭の事、二句共に阿滿とお饅との秀句。

(五九) 與兵衛すし

向兩國元町にありて『狂詩選』に、流行鮓屋町々在、此頃新開兩國東、路次奥名與兵衛、客來争座二間中、とあるより推せば餘り古い店ではなく且又構へも小ほけなものであつたかのやうに思はる、與兵衛は寛政代の人にて鮓は握りである。

押のきく人は松公と與兵衛なり

(政)

云ふ迄もなく押にて鮓をにほはした趣向であるが松公とは次の松ヶ鮓のことである。

(六〇) 安宅松ヶすし

本所御船藏前六軒堀邊にある名代の鮓にて柏屋松五郎の名を取りて松ヶ鮓と呼び、又此お船藏には徳川家の安宅丸を納めありしにより其邊を安宅河岸とも稱へたるに因みて安宅鮓とも云つたのである、本所一番安宅鮓、高名當時莫可並、權家進物三重折、玉子如金魚水昌、と流行山人は激賞してゐる。





松ヶ鮓萬民これを賞翫す (政)  
三聖もうましと云はん松ヶ鮓 (保)

甲は謡曲高砂の文句取り、乙は鮓を嘗めて孔子は酸し、老子は甘し、釋氏は苦し、と云つたと云ふ喩話があるが松ヶ鮓の鮓の加減ばかりは萬人向にて恐らく此三人もうましと云ふだらうとの作意。

荒神様へおみやげの松ヶ鮓 (保)

庭の隅の荒神棚に松の枝を供へるに思寄せて臺所の神様たる嶮大明神に松ヶ鮓のお土産を奉りて御機嫌を和けんと企つる朝歸りの宿六を云へる句であらう。

松ヶ鮓一分べろりと猫がくひ (政)

松ヶ鮓常盤町から買にやり (政)

算盤づくならよしなんし松ヶ鮓 (政)

場所柄だけに随分猫や狐の社會にも持て囃されたものと思はるゝが其價も中々高く、便所で懐勘定をするやうな手合には一寸駈れぬ代物と見えたり、中句常盤町は岡場所にて只松を結ぶ縁語として引出されたる道具に過ぎぬ。

(六一) 蛇目鮓

「江戸流行細見」の嘉永版には、ニツ目と瓦町と記し、同慶應板には東兩國常盤町と記してある。

きつこと蛇の目の奥に河東節 (化)

の蛇の目、此鮓屋かと思へど其奥に河東節の家元、山彦でも住んでゐたかどうか不明であるが只参考品として茲に挟んで置いたのである、句構は河東と加藤とを秀句に蛇の目傘を翳した助六を臭はした趣向であることは云ふ迄もあるまい。

(六二) 翁鮓

さあらば土産まるらさう翁鮓 (政)

元日の翁につめる人の鮓 (政)

是亦賣店未詳なれども翁鮓と云ふ鮓があつたこと丈は此二句によつて明である、句案は共に三番叟、乙は三座にて元日の晝過から太夫元、若太夫によつて舞はれる翁渡を詠んで句である。

(六三) 翁屋煮染

暖簾高掛翁之面、幾箇盤臺煮染温、上野花開三月始、辨當重詰註文喧、と「狂詩選」にある通り、表の暖簾に翁の面を染抜きありたると見ゆ、上野廣小路にありて、花見の頃は特に繁昌した仕出屋である。

翁屋の見世突錢の觀世水 (政)

人も鈴成り翁屋の見世開き (保)

翁屋の煮染で花の三番叟 (政)

璃瑠殿の下に翁屋蓬萊屋 (政)

悉く翁に因んで觀世水、鈴、三番叟、蓬萊等の縁語を結んだ丈の狂句に過ぎぬ。

(六四) 蓬萊屋茶飯

是も其近所池の端にありたる茶屋にて。

龜遊ぶ池の汀に蓬萊屋 (政)

蓬萊の膳に楊枝のちり松葉 (政)

蓬萊で飲まばや宇治の初昔 (政)

などの句がある、初音は煎茶の銘、「蓬萊で聞かばや宇治の初だより」の振り。

(六五) 萬久幕内

「狂詩選」には蒲鉾長芋焼豆腐、干瓢椎茸露自合、一重見舞幕之内、味得直知萬久甘、とある、芝居の辨當を幕内と云ふはもと幕の閉ちたる間に食ふ爲に起りたる名ならんも、今では通常辨當の握飯の名となつて仕舞つたのである。



辨當もうまく食つてる幕の内  
 飛入りが這入つてあらす幕の内  
 幕の内矢挾間をぬけた飯をくひ  
 三角なぶんなきを食ふ面白さ  
 (政)  
 (化)  
 (寶)  
 (安)

などは只芝居の辨當を云へる句にて、萬久とはなけれど参考迄に挾んで置いたのである。

(六六) 女川 菜飯

淺草雷門前廣小路にあつた名高い菜飯屋である。

あすの菜は女川の里の小夜砧  
 観音の雨は女川へ流れこみ  
 (政)  
 (化)

甲は飯に混ぜる菜を、前の晩に組板にてたくことを玉川の袴衣に利かせたる作、乙は俄雨にて參詣の善男善女がどやぐとなだれ込むとの意。

女川の見世に竹串のすて筏  
 菜飯よぶ手は細長い火に當り  
 (保)  
 (寶)

此二句の上より推解すれば、田樂なども焼いたもの、やうにも思はる、「續江戸砂子」には女川を目川とし、且つ東海道、石部、草津間、目川村にて製する所の風味に摸すと附記してある。

菜飯屋の前で尺八仕舞ふなり (政)

此尺八、恐らくは本者の梵論ではあるまじ、察するに藏前あたりの若旦那が、立派な扮装で道樂に竹を吹き歩るく質虚無僧であらうと見たは僻目か。

矢筈の法被菜飯さぞ食ひ倒し (政)

是は聊か手数の込んだ難句であるが、源頼朝、梶原景季に奉行せしめ淺草觀音堂の營繕をさせた頃には、矢筈の紋の法被を着たる梶原の家來共が虎の威を借る狐同様にその界限を横行し、定めて飲食店などを荒したであらうとの想作句である、(第八章日高屋繪馬屋の條參照)蓋し江戸時代金龍山の御本坊たる傳法院の寺男などが權威を肩に、境内の見世物や酒店などに亂入して無錢遊興をなし、世に傳法肌といふ辭さへ残した程な、傍若無人の振舞ありしことに思ひ及ぼして作爲せるものにて、鎌倉時代に菜飯屋があつたかどうかなどは川柳としては無益の詮索であらう、「居酒屋に番場の忠太いやがられ(寶)」と云ふ句はどうしてもこゝらの類句でなければならぬと、私は思うて居る。

## (六七) 山吹茶漬

先づ最初に茶漬屋なるものに就て一言して置かねばならぬが、一體茶漬屋と云ふは空腹を凌ぐ爲めの飯屋であるが、勿論お望みによりて簡単な献立で一寸一杯を催ほす、云はゞ御手輕料理と云つたやうなものである、風俗畫報三八六號に、櫻田閑人は茶漬屋二十六軒を擧げて居る、その何時頃の調かは知らぬが江戸中の方々に散在して居たことは明らかにて。

行燈の柱かくしは茶漬見世

(寛)

うまいものだらけと茶漬食つてゐる

(安)

茶漬屋は破物ばかり客へ出し

(保)

などの句によりて大凡の様子は推せらるゝが、最後の句破物とあるは瀬戸の器物であることは云ふ迄もないが、色氣より食器の飯屋の事として給使の女も十二三位の小娘であつたといふやうな意を寓したる末番に近き趣向ではあるまいかと推せらるゝ、扱て山吹茶漬と云ふは銀座にありて、茶の銘を取つて名とした趣き焉馬の「開卷百笑」にあるが、方外道人著「茶菓詩」にも喜撰非和尚、嬉野似傾城、山吹兼信樂、終成茶漬名と同様なことが詠まれてゐる、尤も信樂

と云ふ茶屋は堀の内にあるは誰も知る如く、「しがらきも小川も妙な客ばかり(保)」などの句あれど夫は恐くば茶漬の方ではなかつたらうと思ふ「江戸細見」などには信樂と云ふ茶屋を新橋にも通新石町にも樂研堀にも出してゐるのである。

實にならぬものは山吹茶漬なり

(政)

花の江戸山吹でさへ子を設け

(政)

山吹も子を産む花の御膝元

(政)

此三句は例の七重八重の國歌により山吹には實が成らぬと云ふ前提の下に詠まされたものであるが終の二句は山吹茶屋の分店が出来たことを云へるものと思はる、但しその場所は不明である、櫻田氏の調には、通三丁目と竹川町と二ヶ所に出してあるどちらか、夫かも知れぬ。

## (六八) 源氏茶漬

二丁町に近き長谷川町にあつた茶漬屋。

源氏のすぐれて安いのは茶漬也

(政)

奢らずに源氏茶漬で安芝居

(保)

はゞきゞを源氏へつれる安芝居

(保)

惣銅壺光る源氏の茶漬見世

(政)

飯迄も白きは源氏茶漬なり

(政)

奢らぬ、白きは平家に對する反語、光る、箒木は源氏物語の縁語いづれも純狂句式である。

(六九) 梅ヶ香茶漬

甲柳友は上野廣小路と教へ、乙柳友は筋違見附の邊と示し孰れに従ふべきかを知らぬが参考のため集拾し得たる句だけを並べておく事にする。

櫻香は鬢附梅ヶ香は茶漬

(政)

梅ヶ香の手鹽につける鶯菜

(政)

櫻香は上野車坂下油店にて賣る鬢附油であるが、句構は只櫻香と梅ヶ香、鬢附と茶漬との語呂對稱に過ぎぬ、乙は單に梅と鶯との縁語結である、總じて化政調の狂句は、多くは掛り結びに重きを置き柳味索然たるものではあるが、風俗史料としては又大に参考とすべきものが少くない。

(七〇) 浮世茶漬

日本橋浮世小路にありて又瓢箪茶漬とも稱へられ、例の「狂詩選」には、俳諧之閑小集筵、浮世茶漬忙ニ出前、下略とある通り茶漬屋とは云ひなだら屢々俳諧の運座などに用ゐられたる小會席と見ゆるが、一體同所には百川樓と云ふ會席料理屋を首として色々なる飲食店軒を並べて居たものと見えて「百川で長鯨を吸ふ留守居客(保)」「門並にうまいものある浮世なり(政)」などの句はあるが適切に瓢箪茶漬を云へるものと思はれる句を見當らぬのである。

(七一) 海道茶漬

「親子草」(寛政九年版)に、安永元年の頃、淺草並木町の内、左側に海道茶漬と書きたる行燈を出し、其外はあまり見當り不申云々とあり、又焉馬の「開卷百笑」にも略同様のことが記してある、思ふに海道と云ひ、源氏と云ひ、又山吹と云ふ皆大體は奈良茶の異名に過ぎぬものであらうと思ふ、猶次頁参考のこと。

氣の毒さ海道茶漬食ふとむせ

(明)

大笑ひ海道茶漬食ふとむせ

(天)

殆んど同一なる類句であるが、句義は二つ共不明である、或は食ひつけぬ野暮な息子にてもあるか但し大駄勞解である。

(七二) 奈良茶

『墨水消夏録』には、明暦の大火後淺草門前に開業し江戸中評判よろし、茶飯なり、もと大和奈良の朝茶粥あさかより起る、と記し、『事跡合考』には、其爲に夫より以前からありたる聖天下の奈良茶衰微せる趣を記してゐる、猶『蜘蛛の糸卷』には、天和の頃淺草並木町に奈良茶飯屋出来、これ柳料理の根原なり、とある、開祖は勿論淺草であらうが其後方々に奈良茶の看板を見るやうに成つたのである、現に

春日形こいつ奈良茶の庭に過ぎ

(保)

の奈良茶などはどこのであるか不明であるが、どこにか奈良茶位の庭には勿體ない程な立派な春日形の石燈籠があつた處があつたに相違ないと推斷せらる、若し又事實を離れて只奈良茶に春日形は分に過ぎるといふ丈の句なれば、餘りに字結に拘泥した狂句といはねばなるまい、猶江戸

の中ではなけれど直ぐ足元なる大森・川崎あたりにも多くありて、萬年屋・龜屋などは特に著名であつたことは多くの柳句が證明してゐる。

送り手は奈良茶位に目はかけず

(明)

奈良茶食ひく品川と息子きめ

(?)

女房をしばつて奈良茶食つてゐる

(安)

などは茲の句なるべく最後の句は、鎌倉の松ヶ岡へ逃げ掛けた女房に追付き、ヤツと六郷前後で取捕へ先づは一ト安心と、俄に空腹を癒す場合であらう。

大森の茶漬十九で初に食ひ

(化)

萬年屋十五年目で内儀食ひ

(化)

大師様奈良茶は龜屋萬年屋

(化)

十九と三十五の時に川崎の大師様へ厄除詣やくよけまゐりをする女である。

まんぢうは鶴で茶飯は龜で食ひ

(寛)

島まうで先づ中食は萬年屋

(?)

茶良茶食ひ中黒の旗襟へさし

(明)

甲は鶴屋の米饅頭との對稱、乙は江之島參詣、丙は矢口の新田參りの歸途である。

奈良茶だの蕎麥のとけちな棧敷也

(安)

此句により愈々奈良茶は總名にて、いろんな小名を附けたものであると云ふ推想を強くするのであるが、辨當の代りに源氏茶漬か福山蕎麥かで間に合はせておく、前掲伊勢屋連の類句であらう。

(七三) 佛店ほふだんの蒲焼

佛店とは上野山下、現在の停車場の邊にて、元下谷町より御徒士町へ通ふ横丁の異名であるが昔は佛具など商ふ見世多かりしより名くとある。此邊に二軒の蒲焼屋があつた。一を濱田屋と稱し一を大和屋と云つた、川柳の狂句は此二軒を合併して咏めるもの多く、別々に切離されぬので茲に一緒に述ぶることにしたのである。尤も濱田屋の方は例の『狂詩選』に茶碗大平鯉濃漿、煮附吸物鯛潮烹、座舗客夥濱田屋、混雜唯聞打手聲、とある通り、寧ろ純然たる割烹店である、然も猶同書には濱田屋奈良茶と題して居る、奈良茶なる名稱の如何に廣汎に使用せられたかは此一事にても解る、又腹唐秋人の『本丁文醉』に佛店を詠じた句に、異香佛店蒲焼店、蹴轉自多山下邊、

(下略)とある通り、此邊は又蹴轉せきせんと名けられた一種の賣笑婦の巢窟であつたのである。

蒲焼もばかりですまぬ所也

(安)

蒲焼を食うて隣へむぐり込み

(天)

此蒲焼は蓋し大和屋にて、隣は云ふ迄もなく蹴轉である。(又毛吳紹とも書く)

卵塔で蒲焼を食ふやうなところ

(天)

佛店には佛壇の道具ばかりでなく、墓所へ供する卒塔婆、香花の類迄も賣りたるものと見えて「毛吳紹客卒塔婆をよんで吐られる(天)」と云ふ句がある。

立つ千鳥ほどに濱田の反古團扇

(政)

の一句亦鰻を焼く見立であること論はあるまい、尤も佛店には濱田ばかりでなく大和屋なども稱する内もあつたのであるが、蓋し共に鰻の茶漬が本業ではなかつたかとも推せらる。

お山の下の開山と濱で食ひ

(政)

濱大和どちらもうまい佛店

(政)

大和屋がわつちやアいと佛店

(保)

甲は瀬川菊之丞、即ち濱村屋路考を見物人が濱々と喝采するに言掛けて女形おんながたと東叡山あづまやまとを秀句

に、濱田が山下蒲焼屋の率先者であるとの意、乙丙の大和屋は阪東三津五郎に擬したる趣向であらう、序に佛店蒲焼の御馳走を、更に五六串添へておくことにする。



佛店鰻の身には地獄なり  
江戸つ子も旅も火葬は佛店  
入道もにはひに迷ふ佛店  
(化)  
(化)  
(政)

蒲焼が讀誦の鼻ににほふなり  
佛店鰻へ山の芋が出来  
線香は鰻屋うなぎ佛店  
丹霞をまねて焼かせるて佛店  
(天)  
(化)  
(政)  
(保)

句中、江戸つ子とあるは江戸前即ち品川・深川あたりの海にて捕りたる鰻、旅とあるは一段下品にて常房兩總地方よりの輸入品、入道は無論佛の色香に迷ふたる平相國清盛を、山内の坊主に擬したる趣向、その山の芋が鰻を食ひに化けて来るのも妙だが、佛店で鰻を賣つて鰻屋で線香を商ふとは世は何處迄も矛盾であるとの意なるが、鰻屋は本町三丁目の藥屋である、最後の丹霞は佛像を焚いておのれが脊中を灸つたと云ひ傳へらるゝ人にて矢張り生腥坊主を諷刺したる句考である。

(七四) 山谷の重箱鰻

江戸時代の末期に著名なる鰻屋として知られ、一名鮒儀とも云つて鮒・鯰其他川魚の料理を得意としてゐると見へて。



重箱の隅で地震を食つてゐる

(保)

と云ふ鯰料理を詠んだ句がある、又場所柄丈けに大分北國征伐の道具に使はれた意味の句が一二ある。

金がなし地で重箱のしやれも出ず

(保)

重箱を出てせいろうとおもひつき

(保)

なしは無と梨とのせいろうは蒸籠と青樓との秀句、

(七五) 田原町の奴鰻

淺草田原町の名物として知られ今日も猶繁昌して居る。

のらくらとした奴もあり田原町

(?)

奴の首を買つて来て猫にやり

(政)

病氣見舞に奴の尻をやり

(化)

鰻は外の魚と違ひ尻尾の方が味くて滋養あるのとも云へば病人には適するであらう。

(七六) 森山の蒲焼

神田昌平坂下、筋違見附の邊にありて、『狂詩選』に、水道橋外住ニ水灣、蒲焼評判久ニ世間、此家風景自然好、窓外有レ森又有レ山とあるはそれである。

森山といへど所は坂の下

(保)

峨眉山月は森山の客がほめ

(保)

當時の御茶の水は、兩岸の絶壁幽邃にして、小赤壁に擬せられ、舟を泛べて勝景を賞した文人墨客多かりしと云へば、森山の座敷からの眺望定めて絶佳であつたであらう。

牛込の舟蒲焼を不斷嗅き

(化)

鼻が氣を悪くして行くお茶の水

(化)

戀瘦に鰻さかせる筋ちがひ

(政)

最後の句は戀病に鰻を食はせたら精氣興奮して、却て仕末に困るだらうと筋違に見附を利かせた狂句である。

## (七七) 和田平の鰻

和田平は日本橋田所町にある、名代の蒲焼屋であるが、句は只。

和田でおごりの三なんは安いなア

(政)

と云ふ大狂句を一つ見出したのに過ぎぬ、三なんは南鯨三つと三男との秀句にて、和田の酒盛に於ける三郎義秀を臭はしたかと思はるゝ鰻に似て捕まへどころのない句である。

## (七八) 白鬚の穴鰻

『多話戯ぐさ』には向島白鬚にありとある。

蒲焼の筋まで息子穴を云ひ

(天)

はこゝの句であらう。

## (七九) 田川屋の鷺料理

金杉大恩寺前にあつて、爲永物などによく引き出されてゐる。駐春亭と云ふのは其別號である。

風爐場淨在ニ于庭、醉後浴來酒乍醒、會席薄茶料理好、駐春亭是駐人亭、と「狂詩選」にある通り構内に瀝洒たる浴室の設備ありたる趣である。

青鷺の首をくゝるは意氣な茶屋

(保)

花落の柚青鷺の口へ入れ

(政)

泥水のかへり田川の鷺で飲み

(保)

場所柄だけに随分朝飯りのお客が込み合つたものと見ゆ。

## (八〇) 海老屋と扇屋との料理

此二軒は其頃王子に於ける有名なる料亭にて、初午や飛鳥山の花の頃などは千客萬來押すな押すなの雑沓を極めたものと見えて海老屋を詠じたる狂詩に、欄干四面水潺々、王子一番普請股、初午稻荷權現祭、晚來賣切客空還、とある。

門口の海老は王子のかざり也

(政)

午の日の奢は海老で鯛をつり

(化)

嫁菜をば値切り海老屋でくらつてる

(化)

赤螺が海老屋へ雑魚のとまじり

(政)

甲は正月の飾りに利かせた鳥居前の海老屋、乙は只俚諺の讀み込み、丙の嫁菜は附近の村娘など賣り歩くものなるべく、丁の赤螺とあるは吝嗇家の綽號である。

團十と糸三王子でもてたもの

(政)

此二軒を役者に擬したる趣向に過ぎぬが團十は即ち海老藏、糸三は半四郎の前名にてその定紋は三ツ扇である。

扇屋へ馴染となつて三の午

(政)

扇屋も地がみの加護で繁昌し

(政)

千垢離のもめ扇屋でしつめ折り

(政)

鳥居を潜りて石段に上る左手に不動の劍を祀り、其下の龍頭より落ちる瀧あり、詣人裸體にて其瀧に浴して垢離を取つたものである、その混雜の爲めに起つた喧嘩を扇屋にて仲直りの手を打つたと扇に因んでしつめ折りと云つた丈の趣向である。

(八一) 萬八の料理

柳橋の北角に巍然として聳えたる有名なる料理茶屋であるが、書畫の會などに多く用ゐられたものと見えて狂詩選には、萬八樓上書畫會、不<sub>レ</sub>拘<sub>二</sub>晴雨<sub>一</sub>御來臨、先生席上皆揮毫、帳面頻附收納金、とある。

柳橋角に大きなうそツつき

(化)

萬八でおごりやしたと伊勢屋いひ

(政)

留主居茶屋さて萬八な娘來る

(化)

萬屋八郎兵衛と聞かれたで知れず

(化)

虚言を云ふことを萬八と云ふに利かせた句であるが三句目は萬八樓が多く留主居役の集會などに用ゐられたことを臭はして萬八な娘くると云つた趣向ならんが、萬八の娘とは其頃立花町あたりを築をくつてゐた例の踊子を指せるものであらうと思はる、さて萬八は萬屋八郎兵衛の頭字を取りたる稱號にて其方が當時通りがよかつたことは句面によりて明かである。

(八二) 平清の會席

深川八幡祠前にありて「狂詩選」には、會席風流辰己誇、坐舖近對<sub>二</sub>水之涯<sub>一</sub>、尾花梅本山本客、

馴染連來此地奢、とある通り尾花梅本などの遊客が女郎などを連れ込んで散財を遣つたものと思はるゝが狂句の側にも矢張り其意味の句が多いのである。

平清の奢の末もう、しほなり (政)

平清へ招く日の出の流行ッ子 (政)

祇女も呼ぶ平清樓の大奢り (政)

平清を出る佐賀町の祇王祇女 (政)

悉く平清樓を平相國に臭はせたる句案であるが、其時代の白拍子祇王祇女を嵯峨野にあらぬ佐賀町の羽織に利かすなどは随分凝つた御趣向である。

(八三) 八百膳の仕出

八百膳は新鳥越にあつて當事著名なる仕出料理屋なるが、「狂詩選」には、八百膳名譽海東、年中仕出大平風、此家欲識鹽梅妙、請見數編料理通、とある。

八百膳は奇妙でござすの器物 (政)

うその近所に八百の料理茶屋 (政)

八百膳と聞いて生姜ははづす也 (政)

八百膳の寮へお出も江戸狐 (政)

ござすは吳須の秀句、二句目のうそは勿論萬八樓の事にてうそ八百の俚諺を割りたる趣向、生姜とは伊勢屋の異名、四句目は眞先稻荷のお出狐に對して江戸の魔性の者を江戸狐と云へる句案であるが、吉原眞先等は當時朱引外にて江戸の内には入らざりしものである。

(八四) 植半の精進料理

植木屋半左衛門は木母寺關屋ノ里にある名高き精進料理屋である。

盛親僧都植半の一旦那 (保)

植半の芋は櫻になりたがり (保)

植木屋のおごりはうまい聾姑 (政)

盛親は精進の秀句にて芋好きであつた、坊さんを道具に、つれづれ草の柳化、二句目は芋料理の果が夜櫻見物となるとの義、最後の句は芋田樂を暗示したる破禮句であらう。

(八五) 大七 洗 鯉

向島の名物にて『狂詩選』に、客込奥庭中二階、温泉石滑暖如<sup>レ</sup>蒸、酒肴色々喰來處、洗出<sup>レ</sup>鯉魚數片氷、とある。

洗鯉くつてつばなの直をねざり (天)

野掛の向島を詠める句にて唧揚子<sup>くはやとこ</sup>で大七を出てぶらくと墨堤を歩きながら茅針賣<sup>つばな</sup>を調弄<sup>あそ</sup>ふさま。

煮方もうまい大七の車海老 (政)

荷方、臺七車、など悉く車力の語を利かせたる駄洒落であるが、臺七とは上方語にて江戸の臺八車のことを云ふと『舊觀帖』の中に書いてある。

掃溜の向ふで洒落れる洗鯉 (政)

いざらばこひからこひへ舟渡し (政)

こひとこひ中を隔つる隅田川 (政)

掃溜とは江戸の異名、下二句のこひとこひは鯉と戀にて隅田川を隔て、向島と吉原とがあると

の義である、尤も向島の鯉は大七ばかりでなく武藏屋もあれば葛西太郎もある。

(八六) 葛西太郎の鯉濃漿

向島弘福寺の邊にありたる其頃有名なる鯉濃<sup>こひじく</sup>の名物である。

木でしたを見て來生きたをれうらせる (安)

「おまんまに鯉打<sup>こひうち</sup>はせる弘福寺(化)」「のびをした木魚をつるす弘福寺(政)」などの句にて上半は同寺に吊してある魚板であること明白であらう、されば牛御前から弘福寺あたりを漫歩<sup>まんぷく</sup>して葛西太郎に立寄り鯉の料理を命ずるとの意である。

向島鯉の看板寺へ出し (化)

向島寺と鯉とでめしをくひ (化)

看板のやうに太郎へ初節句 (化)

甲は弘福寺の魚板を葛西太郎の看板に見立てたる趣向、乙は前項の説明句として推想すべく、丙は惣領の五月鯉を寓したる句案。

太郎がのきも笠木程見ゆる也 (安)

鯉を食ふ相談鳥居下で出来

(天)

舟から見れば三圍の鳥居の天窓と、太郎の家の棟とが見えてゐるので、其下に船を繫ひ、三味や割間に取巻かれて鯉濃で一杯やつてる留守には。

鯉をくふうち供船でおつばじめ

(天)

船頭共は、丁よ半よと采を轉がしてゐると云ふ一件であらう。

名の高いのは鮒五郎鯉太郎

(化)

ヤイ〜鯉はあるかヤイ〜

(天)

太郎冠者あるかと鯉をくひにくる

(化)

鯉の食ひ逃げやるまいぞ〜

(天)

甲は源五郎と葛西太郎、以下皆狂言に言ひ掛けた趣向、最後の句は吉原行の相談を外つす、伊勢屋の息子か乃至は入聲でがなあらう。

いゝかんに煮え切りやれと太郎出る

(天)

鯉をくひ〜兎も角も〜

(安)

洗鯉むほんの起る處なり

(安)

渡らにや聞かぬとわやく太郎也

(天)

いゝかんはいゝかけんの略、わやくはだゝをこねること。

太郎からべら棒になり川を越し

(天)

太郎から人間わづかなど、越し

(化)

鯉のあつものを食つて聲別れ

(天)

一同鯉濃の上機嫌で、たつた五十年の壽命だ遊べ〜と竹屋を越して北國へ繰り込むのに入聲の悲しさ、私は是にてお別れ申します、などは惨めなことである。

變人さ太郎を出ると羅漢也

(安)

太郎から大廻りする悪い風

(天)

太郎から鬢のそゝげぬ男出る

(安)

甲、吉原と反對に五百羅漢へ廻るなどは兎も角も聊か旋毛の曲つた變人、乙、差潮に向風と来て竹屋が渡れぬ、丙、鯉の羹を食へば鬢の毛がそゝげぬと云ふ徒然草の一節を取りたる句案。

川の瀬を分けて太郎と太郎様

(化)

一方の太郎様とは向岸の太郎稻荷を云へるものかと思はる。

(八七) 武藏屋の鯉濃漿

是も向島にある鯉料理であるが、『狂詩選』には、向島高名武藏屋、春花秋月客來頻、葛西太樓今何在、一碗濃漿風味新、とある。

武藏屋で出す辨慶の貸浴衣

(保)

鯉はくせもの武藏屋で氣がかはり

(政)

甲は武藏と辨慶との結び、乙は矢張り鯉から戀の北國征伐。

(八八) 御留川の紫鯉

江戸川筋隆慶橋邊より中の橋邊に至る間は御留川とて禁漁の場所であるが、其間に棲む鯉は三尺以上のものありて紫黑色を帯び所謂紫鯉と稱し江戸名物の一として知られ、將軍家の御料に供せられたものである。

鯉までも紫になる江戸の水

(明)

江戸紫は助六と文四郎

(政)

車胤と王祥江戸川の名所なり

(保)

江戸川は鯉小松川鶴の場所

(政)

皆江戸川の御留鯉であるが、文四郎は鯉の異名、車胤と王祥は螢と鯉、小松川は南葛飾郡中川の東にありて將軍家鶴の御獵場である。

紫は人も奪はぬ御留川

(化)

御留場の鯉はこつちでびくくし

(政)

おあがりの鯉紫の水にすみ

(化)

紫を赤で煮るのは江戸の味噌

(化)

最初の句は紫朱を奪ふの振り、最後の赤は味噌、味噌は自慢の義である。

(八九) 小松川の鶴

龜有も小松も鶴の御場所也

(保)

とある通り、南葛飾郡小松川より龜有に至る附近一帯の沼澤地は、江戸將軍時代鶴の御獵地として知られ、毎年冬季になれば御鷹野の御催があつたのである。

鶴の御成に龜有はきつゝいこと

(化)

鶴有といひたき御場の地名也

(政)

鶴見と龜有蓬萊の左右なり

(政)

など皆鶴と龜とを結んだ狂句であるが、蓬萊は江戸城の見立。

雲に入る鶴は千歳の小松川

(政)

將軍家御自身に鷹を放つて掛合はせ獲給ひし、所謂お拳の鶴を毎年十二月九重雲深き禁裏へ獻納あらせらるゝ格例であつた、其他萬年橋筋、三河島あたりにも鷹お成があつことは「千年が萬年筋で御手に入り(化)」「三河島幾萬年も御飼つけ(政)」、などの句で明であることを附記しておく。

(九〇) 佃島の白魚

春の吸物品川と佃島

(政)

白魚の火は住吉の常夜燈

(政)

夜や寒き白魚に出る佃島

(寛)

甲は海苔と白魚、乙は白魚の漁火を住吉社の燈明に見立てたる句案、丙は住吉明神の「夜や寒き衣やうすき片そきの行合の間より霜やおくらん」の御歌の文句を取りたる趣向に過ぎぬ。

白魚は實をもち藤は花をもち

(化)

白魚のあとへ生れる心太

(天)

佃の住吉社は藤の名所であるがその花盛の頃には白魚は鰯を持つてゐるのである、乙句は春と夏とに於ける佃島の名物を云へる作。

白魚のちよぼものり地の海でとれ

(政)

白魚のかゞりちよぼく沖に見え

(化)

白魚の名所一トちよぼ島篝

(保)

など皆ちよぼを利かせたる狂句であるが、甲は芝居のチョボを寓して海苔地を乗地と洒落れたる句案、乙丙のちよぼは點々の意である、元來白魚は二十四宛笈などに並べたるを一ちよぼと稱したるに胚胎したる趣向である。

佃島女房は二十筋かぞへ

(安)

元來橋浦とは博奕の語にて采の目の數二十一のことであるが何時の頃よりか二十の數の名とな



つたのである。此句より推考すれば安永には猶二十一を一トチ<sub>ニ</sub>ボとしたるものらしく女と云ふものは兎角吝嗇にて一疋宛ごまかして賣るとの諷刺である。

(九一) 深川 剥身

馬鹿貝の剥身は深川名物の一である。

深川で剥身にされる馬鹿野郎

(保)

馬鹿な剥身屋昨朝はどつちらへ

(政)

旦那昨朝は永代橋で御目にかゝり升たが、朝つばらからどちらへ御出になりましたなど、剥身屋が来て餘計なことを喋つたので、麻布の伯父貴の内に泊つて来たなど、云つて置きたい、加減な化の皮が剥けて、山の神の額に角が如龜如龜。

中裏を夜具とすれ合ふ剥身賣

(保)

是亦深川早朝の叙景、呼出し女郎の夜具を大風呂敷に包んで脊負つた若い者と馬鹿貝賣とが行違つて、互に早いね、

剥身賣ゆふべけいどの咄をし

(明)

けいどは警動、傾動、などいろくの字を當てであるが、要するに其筋の役人が遊女屋或は淫賣宿などに不時に飛込んで臨検すること所謂當代の警八風である。此句は剥身屋が来て昨夜深川にけいどが這入つて、大騒をやつた咄をしたとの義である。

剥身小屋四五人隠すらんがしさ

(安)

南無や八幡と剥身の小屋へ逃げ

(安)

此二句亦蓋し警動一件にて四五人の買女がしとけない風をして剥身屋小屋に逃込み上を下への大騒をやらかすとの意であらう。

(九二) 業平橋の蜆

小梅業平橋附近は蜆の名物として世に知られてゐる。

行平で業平を煮る庵の主

(政)

兄弟は蜆と鍋に名を残し

(化)

美女美男蜆と紅に名を残し

(政)

業平は煮られ喜撰は煎じられ

(化)

業平と喜撰はかり秤と榊で賣り

(化)

うこんの病氣業平を呼びかける

(保)

行平は鍋、美女は小町、喜選は茶、うこんは官女の右近を色の鬱金に利かせた句作であるが古來蛭は黄膽病に奇効ありと言傳へられてゐる。

(九三) 浅草海苔

現今は品川大森邊の近海に多く産するも昔は浅草あたりの入海いりうみにて多く製造せられたものと見え兎も角も江戸の名物として頗る著名であるが柳句の方面に餘り多くその詠を見ざるは聊か不思議の感がある。

のりの庭とは浅草でいひはじめ

(明)

海苔のりと法とを秀句にその製造場と金龍山浅草寺と言ひ掛けたる句作であらう、猶雷門前永樂屋は其最も著名なる老舗しんせにて『狂詩選』に、帖々乾來積如紙、年々賣出早春風、白魚吸物豆腐汁、纒有まきニ一枚味不同、とある。

(九四) 伊皿子の麩

伊皿子の麩屋にころもの袖疊

(安)

泉岳寺へはかうかなと麩屋でき

(安)

甲句は三縁山あたりの遊僧が、高輪か品川かへ乗出す途中、出入りの麩屋にて醫者にでも化ける場合かとおもはる、乙は只その儘の句である。

(九五) 野田平蒲鉾

日本橋本船町野田屋平三郎の蒲鉾亦著名である。

淋しさは知らぬ野田屋の鮫砧

(政)

玉川の衣打つ聲は秋の夜を淋しくするものだが、此野田屋の蒲鉾を造る爲に鮫の肉をたく音は中々賑かであるとの意。

野田平の釜にしんじよの月が浮うき

(保)

しんじよは眞如しんじよの振り、糍薯しんじよとはたきたる魚肉を麵粉にて捏ね、湯にて煮たるはんぺんの一

種である。

野田平の近所に傘の角しんじよ

(保)

魚河岸に近き傘と云へば照降町の傘らしけれども、角の中に丸の印を附けたか否不明である、

(九六) 安針町の鳥屋店

安針町に東國屋と稱する名高き鳥屋ありて、いろくの鳥肉を賣つたが『嗜遊笑覽』に「東國屋は水鳥屋にて鶯の目を縫ふ云々」とあり、又戻狂散人の「新士遊來望妓婦」に「あんまりふざけた口をぬかしあがると、安針町へ頼んで口を縫つてもらつてやるぞ云々」とあるので、

罪なこと安針町で針仕事

(政)

安針で諸鳥はみんな目を縫はれ

(政)

の二句は明解が出来る。

明日知らぬ鶯に餌を飼ふ東國屋

(政)

番内を九太夫にする東國屋

(政)

鶯を縁の下に押込んでおくとの意であらう。

東國屋春は燕が軒を借り (保)  
 べ賣にする商買は東國屋 (保)  
 水鳥の羽音でべる東國屋 (保)  
 東國屋首をひねつて書く仕切り (保)  
 など説明の要なかるべく。

ぎつくの肉を安針町で買ひ

(政)

青首の受判をする東國屋

(政)

鶯々は鶯鳥の鳴く聲、青首は鴨であるが、江戸時代にては許可を得ずして鶴や雁は勿論鴨などは捕ることを禁ぜられ、従つて其腹に係役人の検印なきものは、賣買することが出来なかつたものである。

其直では安針町で買ふと云ふ

(明)

東國屋は品物が上等であつた丈に、其價も相應に高かつたと云ふことか、句義は今少し負けと  
 きな、そんなに出す位なら何もお前から買はぬでも、東國屋へ行つて、もつと上等な品物を買つて来るよであらう。

(九七) 平河町の獸肉屋

麴町平河町三丁目、蓋し獸肉屋の元祖なるべく、江戸町中處々にあれども其盛大なること此屋に及ぶものなし、俗にも、んじ屋と呼び看板には一般に紅葉牡丹などを描いてあつた、但し鹿と猪との義に取つたものである。

けだもの屋やまと言葉に書いておき

(安)

歌によむものとは見えぬ山奥屋

(政)

腑分けのやうに切つてゐる山奥屋

(保)

やまと言葉とは肉をししと訓み、轉じて鹿や猪の肉に利かせて、紅葉や牡丹で暗示したことなどを云へる句案であらう、歌によむものとは、鳴く鹿だの、臥猪の床などの文句であらう、山奥屋とは凡て、獸肉屋の異名か、或はさう云ふ屋號のも、んじ屋が何處かにあつたか不明である、腑分けとは現代語で云へば解剖。

冬牡丹麴町から根分けなり

(化)

不風雅な鹿聞き百多いくらする

(政)

冬の紅葉は四つまたのつるし切り

(政)

御ぞんじの紅葉も軒でつるし切り

(政)

紅葉は高尾のこと、三叉の提斬を臭はした句案。

紅葉傘破れてぞ鹿の包紙

(政)

傘の引ッ解を着てゐるむごい猪

(化)

五段目を蛇の目に包む麴町

(政)

五段目は猪の利かせ、『江戸繁昌記』に麴町所賣之肉、包直必用ニ敗傘紙、とあり獸肉は今日の竹の皮の代りに昔は古傘の紙にて包んだものである。

勘平は麴町へもをりく出

(明)

おつかないたち賣をする麴町

(明)

狩場ほどぶつ積んでおく麴町

(安)

勘平は猪打の利かせなるべく、狩場は云ふ迄もなく富士の牧狩にて、猪だの鹿だの猿だの其他狐、狸、熊、狼、あらゆる野獸が累々として積重ねられてゐる。

けだもの屋斂醫者程は口をき、

(明)

薬喰の功能。

麴町芝の屋敷へ丸で賣れ

(天)

芝の薩摩屋敷は肉食を以て聞えた所、切實などは面倒だ野猪一頭持つて参れとの御用命。

麴町狐を馬に乗せてくる

夏は象冬は猪だの貉だの

猪猿は元より象迄もある町

象はけだもの見世からと知つたふり

祭にもけだものを出す麴町

初句は只俚諺の詠込み、以下は全部六月の山王祭に麴町から象の引物を出すことを獸屋に言掛けた句案である。

(九八) 關口の茗荷

昔江戸橋邊から兩岸の關口に掛けて、目白、早稻田附近一帶の地は、荷茗畑多く今にも茗荷谷など、云ふ名稱が残つてゐる、茗荷はもと釋迦のお弟子の榮持と云ふ、ほんやり者の墓から始め

て生えたと云ふ俗説に基き、茗荷を食へば物忘れすると云ひ、又は馬鹿に成るなと云つたものである。

榮持の墓所目白の近所なり

(化)

早稻田の畠榮持の墓のやう

(政)

忘れたりたしかこゝらが茗荷谷

(政)

關口は馬鹿に成る程作るところ

(化)

猫ざねと早稻田は馬鹿で金を溜め

(保)

猫ざね不明、某氏の説に馬鹿囃子の上手な所であつたと。

(九九) 八房の唐辛

四谷の名産として聞えてゐる。

四谷の八房日光へ歩にとられ

(政)

辛い世渡り日光と四谷なり

(保)

日光唐辛亦著名である。

八っ房つけて内藤の駒は出る

(政)

四っ房の珠數八房をさして行き

(保)

四谷新宿は堀の内への道であるので、四房の珠數を首にかけ團扇太鼓を鼓いて來往する人が多かつたのである。

(100) 鳴子の瓜

追分の西鳴子地方は瓜の名産として知られ。

縦縞の揃で鳴子江戸へ出る

(政)

鳴子道鼻緒が切れて儒者こまり

(化)

甲句は眞桑なるべく、乙句は瓜田の履。

(101) 砂村の瓜

小名木川以南、砂村附近古來南瓜の名産として知られ、國芳の描いた「江戸自慢名物くらべ」と云ふ浮世繪には、砂村たうなすと題して御女中が南瓜を持てる繪がある、句面より推考するに

庄屋或は名主と云つたやうな者が、お城へ出て南瓜などを上納したもろらしく思はる、江戸砂子には西瓜の名産とあり、又句には胡瓜とあるも要するに南瓜も西瓜も又胡瓜も凡て瓜類を多く出したものであらう。

お切手にかぼぢやを持つて控えてゐ

(明)

砂村はかつばで暮の尻をよき

(政)

別莊は砂村にしてなア嬢うア

(政)

かつばは胡瓜の異名、河童の縁語を引いて尻を拭きと大三十日の借金拂ひを云へるもの、最後の句は別莊を砂村に建て、お前の好きな南瓜を腹一杯喰はせたらよからうなア噂々ア也、

(102) 駒込の茄子

本郷駒込附近は茄子の名産地であるが、此處には淺間社の人造富士があり、又其邊から千駄木へかけて鷹匹の組屋敷があつたので、川柳家は好材逸すべからずと、すぐに、

駒込は一富士二鷹三茄子

(化)

と唸つてゐる、其他。

富士山の出見世は鷹も茄子もあり (保)

千駄木に鷹駒込に富士と茄子 (政)

江戸の富士裾野は茄子の名所也 (化)

などの句がある、尤も本物の富士の裾野、久能山近邊は矢張り茄子の名物にて、年々將軍家に献上したるものである「裾野から夢のゆかりを御献上(化)」「茄子通る頃は八里の山櫻(寛)」などは其事を云へる句で、

駒込の巾着切は箆を持ち (保)

駒込の巾着馬がつけて来る (政)

なすの夜市様を駒込で覚え (化)

甲乙は巾着茄子、丙是那須與市の駄洒落であるが、句面より推想すれば夜茄子が立ちしもの、様である。

(103) 四方の酒味噌

和泉町の四方久兵衛、俗に四方ヶ店と稱へ赤味噌と銘酒瀧水とて江戸中に聞え、「狂詩話」には劍



菱瀧水土藏土充、上戸往來嘗舌通。出店分家行處在。味噌赤似四方紅。とある。因に記す、世に寢惚先生と云つて誰知ぬ者なき太田南畝は、別號を四方赤良と稱へ、此酒屋の菰表の印即ち扇巴の判を用ゐて四方山人と書いたのを、支那人が誤つて蜀山人と讀んだと云ふので、終には自ら蜀山人と稱するに至つたと云ふことである。

ほりものゝ文覺あびる四方が瀧 (保)

瀧水を裸になりて息子浴び (化)

瀧火を榊で量るは和泉町 (化)

孝の徳四方の瀧火ほど飲める (化)

青ざしの初穂で父母へ四方の瀧 (保)

瀧の水飲んで親父はよろよろ (政)

四方の瀧のめども盡きぬいづみ町 (保)

一は四方ヶ店に矢大臣を極込んでる栗殻紋々の大入道を那智の文覺に擬した趣向、四、五は養老の瀧の孝子、青緋は御褒美の青銅十貫目、六は親父橋を架けたと云はるゝ例の吉原の開祖甚

右衛門を仄めかしたやうな臭がある七は謡曲狸々の文句取。

命の洗濯瀧水に紫檀棹 (政)

酒味噌で其名も四方に響くなり (政)

重箱に取巻かれてる四方ヶ店 (天)

明樽を味噌で積みおく四方ヶ店 (保)

町鑑四方のあたりが江戸の味噌 (保)

紫檀棹は三味線、味噌は自慢の意であること云ふ迄もあるまい。

味噌を煮るところを朝行き夜戻り (安)

看板を見るなと味噌を買ひにやり (安)

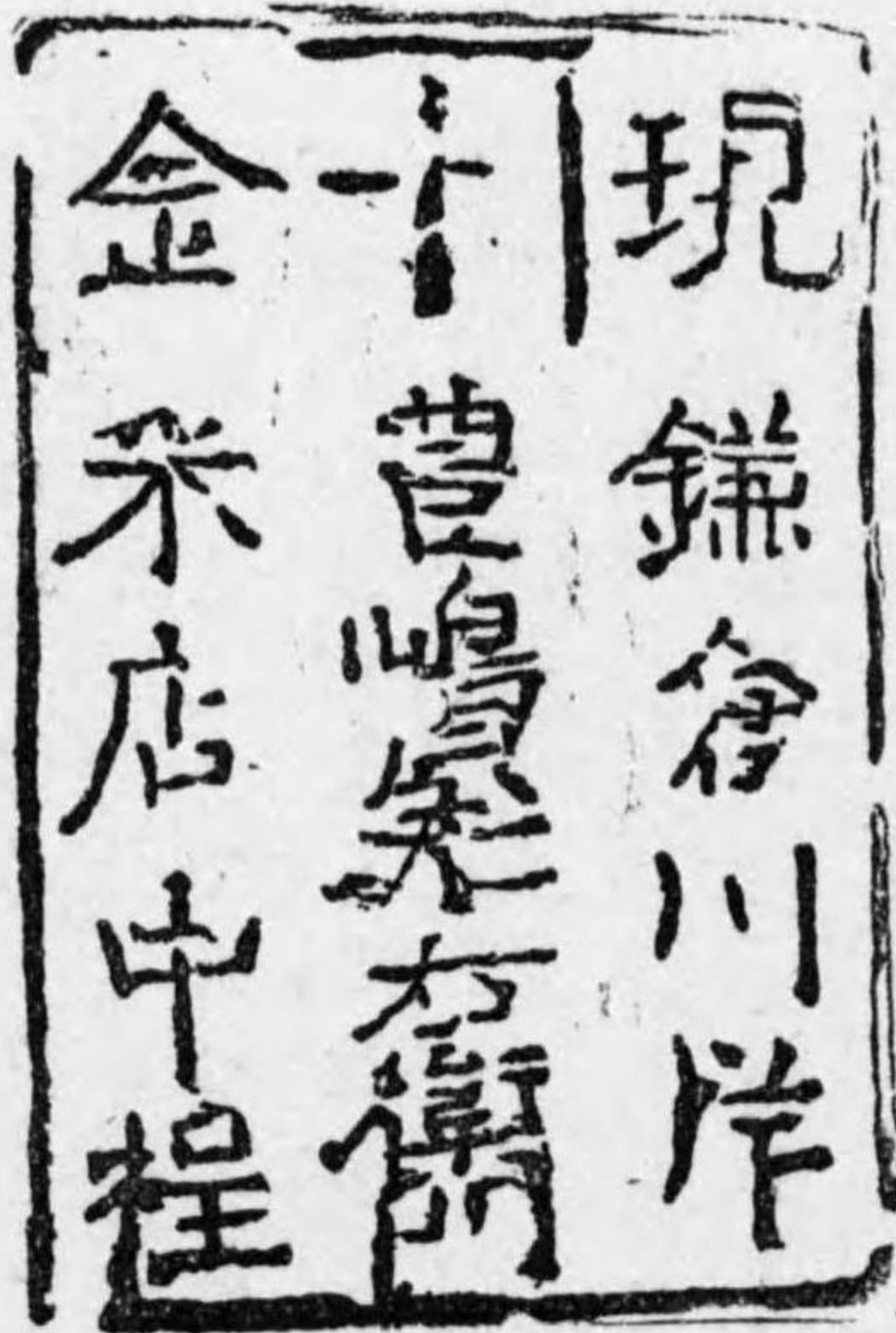
使より先に來てゐる四方ヶ味噌 (安)

此味噌は一幕見たにちげへねへ (化)

日本橋の方から和泉町へ行くには中村・市村兩座の前を通らねば成らぬので、丁稚などが芝居の繪看板に見惚れる位はまだしも、ひどいになると一幕立見をして使が遅くなるやうなことはありさうな事である。猶四方に關する句一二あり第七章外法下駄の條参照のこと。

(一〇四) 豊島屋白酒

神田鎌倉河岸豊島屋の白酒と云つては頗る有名なものにて、毎年二月廿五日に雛祭の白酒を賣る、一年中只此一日ばかりの賣出にて其雑沓紛擾は言語同斷である、されば當日は店前に矢來を



結び、一方の入口より切手を求めて這入り、酒と取替えて他の一方の出口より出るやうに成つてゐるも、猶萬一怪我人など出来る恐があるので、豫め醫者が一人出張つて居たと云ふ程にて、此一日の賣高は數千兩に上つたと云ふことである、『狂詩選』に白酒高名豊島屋。氣強色薄一家風。



人々欲買多難買。賣始賣終半日中、とある所より見れば、晝過には大抵賣盡したものと思はる、平常は普通の酒見世にて、又田樂を賣りたることは前項真崎の條に既掲の通である、商標は曲金に十の字にて満月舎の「印さへこと十分と十の字にかねをつけたるとしまの樽」と年増女の鉄漿に言掛けた狂歌がある。

谷七郷をとしまでおつぶさぎ (天)

石垣の向うにとしま並んでる (天)

としまの腎虚内田屋へ矢の使 (化)

としまよりやの字色白きめこまか (天)

皆豊島と年増との秀句、甲は谷七郷にて鎌倉河岸を利かせ、乙はその建並べられた酒倉、丙は賣切らした爲め昌平橋の内田へ大急ぎで仕込みにやるとなるか、丁は年増よりは豎やの字の腰元の方が色も白く肌も密でよいと豊島屋と矢野との白酒の優劣を云へる句かとも思はる、矢野は數寄屋橋の側にある酒屋にて「弓町の近所であたる矢の、見世(政)」などの狂句がある。

家名をも郡を名乗るいゝ酒屋 (?)

豊島屋で又八文が布子を着 (寶)

或は豊島屋はもと豊島郡の出身かも知れぬと想像せらるゝも依るところは無い、八文は下酒一合の代、つまり馬方などが一合の榊香に内から身を温めるとの意である。

十の字の名代は酒と唐辛 (化)

唐芋の十の字は未詳。

(一〇五) 内田屋の劔菱

内田屋は神田昌平橋外にあつて、「狂詩選」には昌平橋外内田前、德利如山酒爲泉、孔子門人多上戸、瓢箪携至是顔淵、とある。

内田とは云へど所は外神田 (政)

足利は酒屋新田は大神樂 (化)

内田屋の商標は丸に二引即ち足利家の定紋、大神樂は丸一即ち新田家の定紋である。

鳥飼は平家内田は源家なり (化)

前項饅頭の鳥飼の商標は揚羽蝶だから平家の紋であるが、足利は源氏の系統である便宜上茲に二三の銘酒を挾んでおくことにする。

禁酒もうかと劍菱でつきやぶり  
 すき腹に劍菱ゑぐるやうに効き  
 劍菱はめば飲むほど物忘れ  
 甲乙は劍に突く、抉ぐるの縁語結、丙は蓋し不動の劍を飲んで性根が治つた祐天の反對を云へる趣向。



劍菱の大紋を着る 俄雨

(政)

劍菱を引つけかけようと乞食しやれ

(政)

二共に酒樽の菰を被つた形である、劍菱は内田の銘酒とあれども「狂詩選」には劍菱瀧水は四方の土藏に充と云ひ、又「膝栗毛」には豊島屋の劍菱と書いてある、思ふに内田でも四方でも賣つたものであらう。

六つの花見に七つ梅さげて行き

(政)

帯解の祝儀の酒も七つ梅

(化)

神酒の名にいゝは木綿屋七つ梅

(寶)

七つ梅は❁の菰印であるが、一書には内田の七つ梅とあるが句には明に木綿屋とある、いづれを正とすべきかは亦不明である、句義は甲が雪見、乙が七つの娘の帯解祝、丙は神に捧ぐる四手は昔は木綿を用ゐたところから、木綿屋の銘酒が神酒には至極であるとの屁理窟かとも思はる。

菊水は菰かぶりに過ぎた紋

(化)

菰印は紫である、一書紙屋の菊水とある、然るに「春の若草」三の六に、内田の菊を二升云々の語がある、其他、

男山車力こつそり岩清水 (保)  
 びんとした苦みばしつた男山 (化)  
 御輿程騒ぐ新酒の男山 (政)  
 などの狂句もある。

(一〇六) 山屋の墨田川

淺草並木町山屋、代々名は半三郎、商標は④、墨田川は其酒銘であるが、墨田川の水にて醸造するのでかう云ふ名を命けたとある。

吸筒の中も名所の墨田川 (化)  
 川の名を銚子へ入れる雪見船 (政)  
 墨田川氣ちがひ水の名にはよし (化)  
 品のいゝ氣ちがい水は墨田川 (政)  
 後の二句は蓋し梅若を慕うて來て狂女となつた母を臭はした趣向であらう。  
 ありやなしやと振つて見る墨田川 (寛)

墨田川ありやと問はん安酒屋 (政)  
 いざこと問はん一升はいくらする (政)  
 など、例の業半の「名にしおはゞいざこと問はん都鳥我思ふ人はありやなしや」とを基とした趣向である、尤も最後の句は次頂の都鳥を詠んだものとも取れる。

(一〇七) 宮戸川と都鳥

鯉丈の「和合人」に、宮戸川は駒形町内田甚右衛門内銘酒とある、且つ「べらほうめへ淺草で銘酒さへ見ると隅田川だと思ふやつさ、是は宮戸川と申す御酒ごしゅだは云々」又「今時宮戸川を知らねへものがあるものか、ちつとおつりきな家には、都鳥とついた樽が一本ねへと、臺所がしまらねへ様だは云々」とある、思ふに内田に宮戸川と都鳥と二種の銘酒があつたかと思はる。

涼船網手の猪口で宮戸川 (保)  
 都鳥飲んで足まで赤う成り (保)  
 千鳥から一軒飛んで宮戸川 (政)

甲は網手と宮戸川との結び乙、吾妻橋から上に居る鷗を特に都鳥と稱し、足が赤いなど、云ふ

誤信に基ける句、丙の千鳥は未詳。



(幾世餅の追加)

### 第二章 薬品の部

#### (一〇八) 三丁目生薬

本町三丁目は鱒屋を始として、多くの生薬屋軒を接して居たので、薬屋町として世に知られて居たのである。

三丁目句はぬ見世が三四軒 (天)

三丁目どうか病ひさうもなし (天)

神農の屁は本町を通るやう (政)

など、ある通り神農の屁もかくやと思ふばかり、薬の匂が馥郁として全町に漲り茲に住んでゐたら病氣などに罹りさうに思はれぬ程である。

得知れないものを乾しとく三丁目 (寛)

本草を道へならべる三丁目 (天)

三丁目蓆の上で蹴づかひ (安)

## 割床で薬種挽いてる三丁目

(天)

いづれも三丁目の叙景であるが、道端へは各種の草根木皮の外、いや赤蛙の乾物だの、河獺の黒焼だの、はてはウニコールの齒だの穿山甲の皮だのと、恰も本草綱目の土用子でもしたやうに得體の知らぬ珍獸奇蟲が所狭くまで並べられ、中には蠍のやうなもので盛に草根を打碎いてゐる伴頭もあれば、見世先には又割床よろしくの枕屏風を立て、頻に木皮などを挽いてゐる、丁稚もある。

袋町とも云ひさうな三丁目

(天)

一丁を薬袋ておつぶさぎ

(明)

本町でせなッこゝは袋町か

(政)

どつちらの袋か知れぬ三丁目

(寶)

薬屋の看板は、大きな袋を店頭にぶら下げたものにて、三丁目はどこもこゝも袋だらけ、田舎から出た哥兄弟せなけいが茲は袋町だんべいと云つたとは無理もあるまい、終りの句は恐くば鳥飼和泉の饅頭まんどう(第一章参照)であらう、「狂歌戸名所圖會」にも「諺の薬は九層倍くゝの大きく見ゆる袋看板」とある。

## 三丁目醫者の藏宿らしいところ

(明)

浅草の藏前が武士の藏宿であつたと同じく、三丁目は醫者の札差とも謂つべき關係にて、長袖坊主の藪唐棒庵老だの、慈姑髪一本指の帚村毒庵先生などの出入繁く、随分内幕に立人つたら、薬禮相當の借金や、得意を竺あしに融通の強請などもあつたことであらうと思はる。

俄醫者三丁目にて見た男

(?)

昔は少しく本草に目が明いて、傷寒論の一冊も読めれば、結構に醫者として立つて行かれた世の中、薬種屋に七八年も奉公して心掛のよい伴頭は一躍して、太鼓持兼帯の笥位には成れたのである。

本町ニ味喰日ヤのあれバぬたのて

(政)

本町の鰯屋下物賣らぬところ

(安)

鰯だの酢だのと塞く三丁目

鰯だの酢だのと丸で酒の下物のぬたでも出来さうな名だが、實際は大違ひ、二軒ながら薬屋であるとの意なるが、酢屋は四丁目ではないかと思ふ或は何軒もあつて三丁目にもあつたかも知れぬ。

(一〇九) 酢屋三臙圓

本町四丁目三臙圓の元祖は、玉川座々元玉川彦十郎であると云はれてゐる。「狂詩選」には箱入人參三臙圓、本家酢屋本町邊、世間勞症虛分者、一劑嘗來性命全と激賞してゐる。

二つ三つ袋四丁目まであまり (安)

四丁目もまだちらほらと匂ふ也 (天)

○三臙圓に入れてある猿の肝 (保)

初めの二句は必しも酢屋とも限らねども、四丁目にも二三軒位は藥屋があつたことを證する爲に掲げて置いたのである、又最後の句は事實そんなことがあるかどうかは知らぬが、句案は蓋し三藏法師に孫悟空の結びかと思はる。

(一一〇) 木谷實母散

中橋木谷の元祖は江州の人、木谷藤兵衛と稱し、元祿の頃江戸に來つて、大鋸町に薪炭の業を營みしが不圖した事より、長崎の醫師に産前産後妙藥の祕方を授かつて賣出した處、忽ち江戸中

の評判となり、最初は只眞木屋藥と稱したるが、後實母散と改められたとある、木谷實母散と云へば今日も猶繁昌してゐる。

眞木屋藥は賣上げを束ねてる (保)

へついでの中で眞木屋を女房のみ (保)

甲は賣上げの錢縋を束ねて居るさまを薪に利かせた作、乙は竈と眞木との縁語を結んで、出産の兆があるので、お齒黒を附けたあとにて、血の道の藥を一服呑んでおくとの意である。

○里へ來て氣兼せず飲む實母散 (化)

○中橋の藥繼母にやきかぬやう (天)

中橋の木谷は母が世をすこす (保)

中橋に嘘の實母も二三人 (政)

後の句面から推せば、同町に二三軒位者者の實母散があつたらしい。

中橋は飲む淺草は食ふまきや (天)

まきは賣らずに藥だの手だの (天)

淺草に眞木屋と云ふ蕎麥屋ありしと思はるゝも不詳、「狂詩選」には江戸中橋實母散、和方神妙

即効奇、産前産後皆通用、最好掃入血道時、とある。

(一一一) 本町の孫太郎

○中橋が實母本町孫太郎

(政)

本町三丁目小西はその専賣店である。

孫太郎姑の疳の虫にきき

(政)

の句によりて疳の蟲の藥であることが解かる、孫太郎蟲は磐城國刈田郡齋川村さかいはの溪水中に産する船蟲に似たる蟲と言海には書いてある。

(一一二) 近江屋感應丸

正野法橋立三製、驅<sup>ニ</sup>役萬病<sup>ニ</sup>都回<sup>レ</sup>春、一粒百疔滅法價、乍<sup>レ</sup>去即効實如<sup>レ</sup>神とは「狂詩選」の激賞する所であるが、

國の山居ながらに見る近江店

(化)

の句は此近江屋を云へるものと推想せらる、近江屋と云ふから多分本國は江州なるべく、其

江州の琵琶湖の土で一夜に出來たと云はる、富士山がすぐ櫓先に見えるとの義であらう、近江屋は室町一丁目にある。

(一一三) 奇應丸

奇應丸の本舗は何處であるか異説區々として判然せぬ、思ふに方々にありて孰れも自分を以て元祖と稱へたものであらう、信州花月翁の示す所によれば福島の高瀬兼喜と云ふ人木曾山の熊の膽を以て製したるものとあるが「續江戸砂子」に享保代に於ける著名の商店を列擧せる中には、奇應丸、兩國柳原同明町敬心院とあり、幕末頃の「江戸名高良藥鏡」には本銀町四丁目とあり、「東京名所圖會」には通一丁目白木屋はもと雜貨店なりしが奇應丸の賣出元として著名なる由を記し、「江戸から東京へ」には文化十一年京傳製出し、寛政五年京橋附近に袋物屋を開店して大繁昌云々とあれども、文化と寛政と年代の錯誤あるのみならず、奇應丸を咏んだる句は寛政より十年前の安永代に見出さる、所より矢田氏の御説も信川出來ぬ。

新造にみんなのまれる奇應丸

(安)

奇應丸のんでねからきいせん

(安)

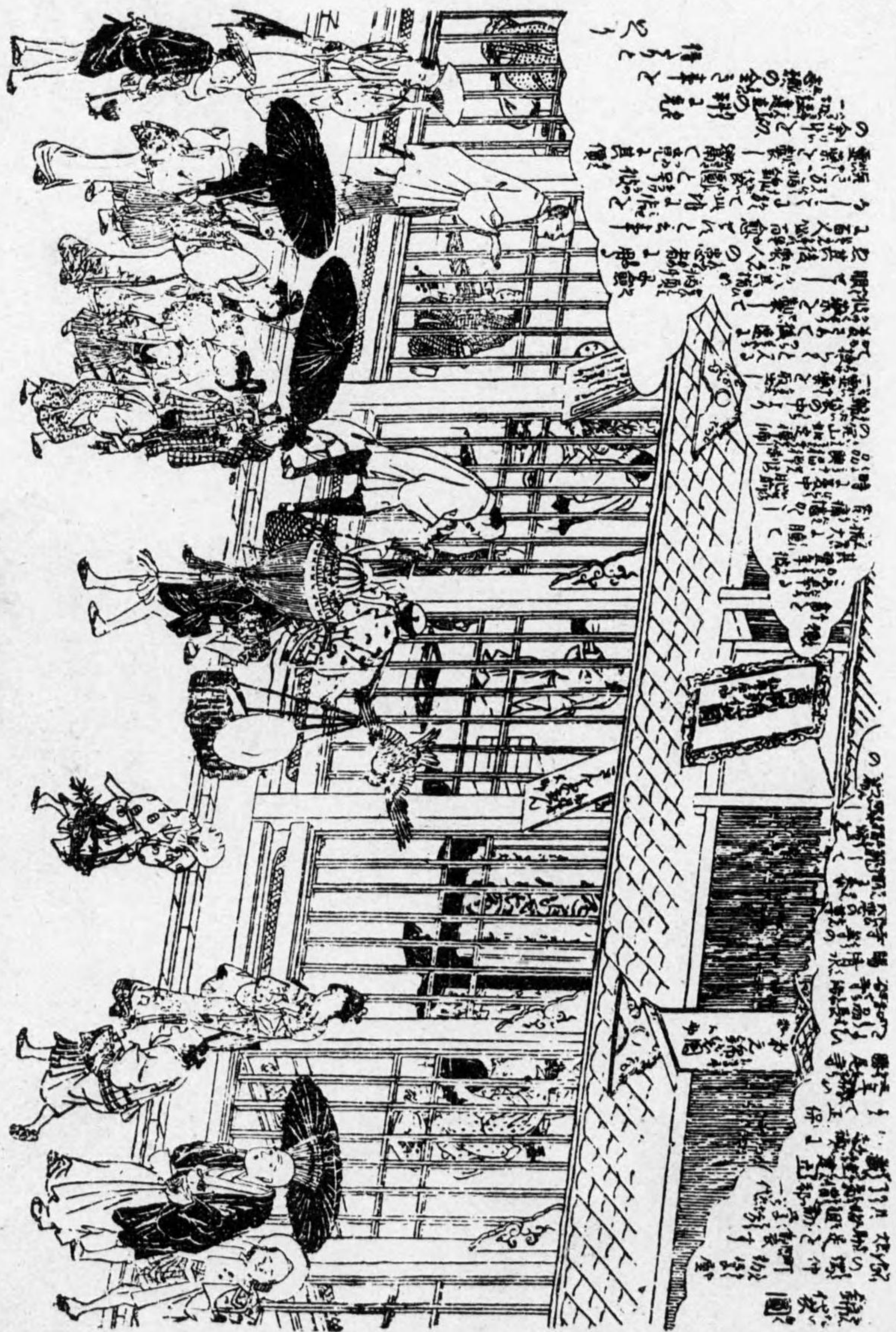
ちるぶとり案じ過して奇應丸 (政)  
 三粒程皿へ手品の奇應丸 (保)  
 家に年寄小供には奇應丸 (保)  
 などの數句により推解するに、癩や蟲の藥なるべく、小供ある内の家庭藥として備置かれたものらしく思はる。

(一一四) 勸學屋錦袋圓

元祖了翁僧都が、如定禪師の夢想により藥法を授かりし時に、錦の袋に入れて賜はりしにより錦袋圓と名づけて賣出した所、靈効恰も神の如く忽にして三千兩の大金を儲けたので、上野に勸學寮を起して、典籍三萬餘卷を納め、東叡山門主の許を得て勸學屋と號したとある、主人は代々大助と號し、表七間の間口悉く格子戸を以て立て切り、其透間より藥と錢との引替をなすこと他に類を見ず、尤「東京名所圖會」などに淺草傳法院向にも勸學屋ありし趣を記載しあるも、全く祖を異にするもの、如く、一般に勸學屋と云へば此池端の錦袋圓のことである。

すがらきを弾いてゐさうな勸學屋

(天)





吸附けて出しさうな見世勸學屋

(化)

素見なし錦袋圓の格子先

(政)

池の端男ばかりの惣籬

(保)

加藤の人と呼びさうな勸學屋

(政)

などは全部吉原惣籬に於ける張見世の格子先に擬したる句案、清掻すがかきとは見世先にて内藝者が弾  
立てる唄なしの三味線、加藤の人とは直ぐ其裏の加藤織之助を指せるものなるべく云ふ迄もなく  
「向うの人——」の洒落である。

勸學屋腕をまくつて錢を突き

(安)

格子から錢突く見世の裏は蓮

(安)

手ばかり出して賣るのは池の端

(天)

勝手から蓮見の這入る勸學屋

(安)

勸學屋蓮をうぬがのやうに見せ

(化)

初の二句は買人、次の一句は賣手、後の二句は不忍池の蓮である。

生まきまの雀錦袋圓で啼き

(保)

蒙求は知らぬ勸學屋の丁稚

(政)

は勸學院の雀蒙求を囀るの柳化。

錦袋は髯と智恵とを入れておき

(化)

格別な智恵で錦の袋入

(化)

了翁は長き白髯でもありしかと思はるゝも單に推想に過ぎぬ、乙句御夢想の錦袋と云ふのは元祖の知恵袋から出た商略かも知れぬとの諷刺かと思はる。

圓通の法味で賣れる勸學屋

(化)

觀音を賣るは息子と勸學屋

(化)

の圓通は或は附近香煎茶見世にてはなきかと疑ふべき節あるも未だ俄に確定は出来ぬ、暫く未解としておく、次句の賣るは托るることにて、觀音様を煮出しにしてどら息子は吉原に遊び、大助の先祖は錢儲をしたとの義であるが、前掲御夢想の錦袋藥を授かりしは、大和の長谷寺、京都の清水寺等に參籠し指燈を燃やして祈願せし時のことにて、其授かつた藥を指に貼けたれば立どころにその痛が去つた云々とあるにて明解が出来る、「狂詩選」にも格子數間錦袋圓、小僧取次靜如禪、請看一貼百文包、現出觀音是結緣、とある通り、袋紙に觀音様が描かれたものと推想せらるゝ。

勸學屋そりや抜いたには驚かす

(明)

花見の季節には、生酔の侍が人切庖丁を振廻はし、そりや抜いたぞと群衆を騒がせる様なことが往々あつたと云ふが、そんな場合にも、勸學屋丈では格子戸で締切られてゐるので、決して亂入される心配なく平氣の平左衛門を極込んで居るのである。

丸藥を座敷牢から賣はじめ

(化)

池の端匂ふ男は籠の鳥

(寶)

甲は勸學屋を座敷牢に、乙は格子を鳥籠に見立てたる趣向に過ぎぬが、匂ふ男とは云ふ迄もなく藥屋の伴頭小僧である。

勸學屋中條をする隠し藝

(天)

中條は墮胎醫者のことであるが、錦袋圓がおろし藥の効用あるにや疑はし、但し「東京名所圖會」に掲ぐる所を抄録すれば、錦袋圓に五方あり曰、萬痛加減錦袋圓、曰通經加減錦袋圓、曰立効神方錦袋水、曰逆上下劑安寧酸、曰小兒藥王蒼龍丹である、此内通經加減錦袋圓の下に一名朔日丸と云ふ括弧が施してある、朔日丸は有名なる避妊藥(次項を見よ)なれば此句は多分其朔日

丸を云へるものであらう。

女を先へ錦袋圓買ひ

(天)

蓮の茶屋錦袋圓で間に合はせ

(天)

大助が薬も二ッ目屋ぐらゐ

(天)

四ッ目へちつとさゝはる勸學屋

(安)

想ふに錦袋圓は寶丹仁丹等の如く、薄荷など調味したる興奮藥なるべく、蓮の茶屋とは江戸時代にも不忍池畔に軒を並らべた男女密會の茶屋、四ッ目屋とは例の兩國に名高き淫藥店、である是以上は説明を憚る。

勸學屋内へはひるは身内なり

(安)

格子の内迄這入るのは親類縁者のみにて、普通のお客様は絶対に内には入れなかつたのである。

(一一五) 朔日丸

毎月朔日に其一貼を服用しておけば、其月中は決して受辱せぬと云ふ避妊藥にて、浮氣後家や蓮つ葉娘等に至極重寶がられたものだが、「江戸から東京へ」には中條流の墮胎醫者が賣出したと

書いてある、我々もそんなことであらうと思ふばかりで久しく其本家本元の吟味を怠つて居たのであるが、偶然勸學院調査の副産物として錦袋圓五方中の一種であることが解つた。

持藥さと朔日丸を後家はのみ

(寶)

霜月の朔日丸は茶屋でのみ

(寶)

十一月一日の茶屋とは、云ふ迄もなく顔見世初日の芝居茶屋である。

いやがつて月に一筋づゝがのみ

(明)

月並をのみく下女はぞんざへる

(寶)

ぞんざへるは巫山戯ること。

朔日で拂ふは月の滞り

(政)

朔日を丸めて月をおん流し

(化)

日をのんで月を流すは戀の病

(保)

朔日をやめて十五夜腹に満ち

(政)

みそかごとあるで朔日賣れる事

(保)

などの句面から推せば避妊ばかりでなく墮胎の効果もあつたものと思はる。

(一一六) 龍王湯

是亦月浚へ血の道薬にて「不落観場」と云ふ本には調血龍王湯おろしと黒地に白字もて書きたる長い箱を脊負うたる繪を出し發賣元は伊勢町とある。

くらやみで龍王湯をがぶりのみ

(寶)

あきらめて氣強い女房ごぐりのみ

(寶)

などの句より推せば、どうしても暗から暗への間引薬としか思はれぬ。

(一一七) 桐山地黄丸

浮世小路角桐山三了は其本家にて、看板には六味七味地黄丸とある。「江戸名物鹿子」には本町岡田忠助とある或は元祖と發賣店と別々なるか一切不明である。

あゝじんが鮮い哉と地黄丸

(保)

水切りにつき當分の内地地黄丸

(?)

地黄より在番が身によっくきゝ

(保)

腮で追ふ蠅は六味へたかる也

(天)

六味丸のんでる側にいゝ女房

(化)

めんどりの勧め玉子湯で地黄丸

(保)

地黄丸女房のほめる薬なり

(安)

息子の病六味より三味がきゝ

(政)

など孰れも説明するまでもなく、補腎薬として汎く用ゐられたる、現代のトツカピン式妙劑と見えたり。

(一一八) 俵屋風邪薬

「俵言集覺」に元祖京都四條俵屋肥後掾、一名五積散と云ふ丈にて、江戸に於ける發賣店を示して居らぬ。

二三俵のむと抜けてく流行風

(寛)

俵屋をたてつけてぼろさらひ着せ

(安)

かきつばた盗み俵屋煎じてる

(安)

掛人俵屋至極合藥

(明)

戀風だのに俵屋を母すゝめ

(化)

大黒も風邪で俵をのんでゐる

(化)

大黒は寺の梵妻のこと。

龍女の頭痛俵屋で全快し

(政)

米かみピン／＼俵で直に治し

(保)

此二句は秀郷を寓した趣向である。

(一一九) 鐘馗散と益氣湯

二つ共に本舗末詳なれども、甲は風邪藥、乙は盜汗止の藥であることは句面に依つて明である。

玄宗の邪熱をさます鐘馗散

(政)

女島間引く藥は鐘馗散

(天)

鐘馗は玄宗皇帝の夢に現はれた偉人、女護島は南風に向へば孕むと云へば引いた風が抜けたら

胎兒も同時に流る、理窟、尤鐘馗散の包装には鐘馗大臣の繪が描いてある。

綸言が夜なく／＼出ると益氣湯

(化)

綸言汗の如しを拭つた作意

(一二〇) 田町の反魂丹

芝田町四丁目堺屋は有名なる反魂丹の老舗であるが、『狂詩選』に田町元祖反魂丹、一粒吞來諸病安、霍亂食傷又腹痛、懷中貯得萬人歡、とあるは夫である、今は絶えてなし、尤享保年代には柳原同明町心敬院の反魂丹著名なりしとある。

もしもやと反魂丹をくべて見る

(寶)

芝のなら反魂丹も合ひやせん

(化)

反魂丹と反魂香を一緒にするなど茶番の八重垣姫にでもありさうな滑稽、芝と聞いたばかりで藥までが效かぬとは芝口六十餘萬石、竹に雀の殿様もよく／＼高尾には嫌はれたもの哉

山賣は附木にちつと附けて出し

(明)

山賣の藥さくのは口ばかり

(政)

山賣とは『春告鳥』の中にも山賣の反魂丹の語がある通り、もと恐くば富山の藥賣の略語ならん

も、後には如何様もの、異名となつたものらしく、「俚言集覽」に江戸市中にて元の知れぬ薬を賣りあるく者を山賣と云ふとある。

(一一一) 虎屋外郎と五種香

兩國横山町角にあり、思ふに相州小田原虎屋の出店であらう、「續膝栗毛」八の上に、小田原の虎屋藤右衛門圓齋武重はその本家にて看板は桐に金雞なりと記し、添へた狂歌には「看板の虎の威をかる薬とや千里の外へひやく功能」とありて、看板の點に一寸齟齬があるやうだか、繪には確に虎を描いた大きな衝立が店頭を立てられてゐたと思ふ、「俚言集覽」には一名透頂香トウテイカウと記し、言海には元人陳宗敬と云ふ者慶安中歸化して筑前博多に住して傳授したり、陳は禮部員外郎たりしかば、此薬を一名外郎とも呼び、相州小田原の宇野氏製して賣る、黑色方形にして痰を治す趣を記せり、山口の名産に外郎と稱する羊羹に似た菓子とは全く別物にて、團十郎の外郎賣と云ふは云ふ迄もなく此薬の方である。

好きな下女透頂香の近所也

(安)

など、小田原外郎と相模女とを詠んだ句がある。

安禮者五種賣を供に連れ

(化)

句面より推せば、五種香賣は其箱を首から掛けて歩くものと思はる、瀧亭鯉丈の「滑稽和合人」の二の下に、甲「おれも同じく禮者でもあるめいから、やつぱり棧留の羽織で五種香供に成らう。乙「ム、柳行李を包んで首へ掛け、た奴か」とあるので大凡その恰好が想像せらるゝ。

虎の威を五種香賣もちつと借り

(明)

老込の陰間五種香賣に成り

(政)

後の句の上から推考すれば、地紙賣式の面炮オモビ男もあつたと思はる。

(一二二) 定

齋

眞鍮の金具を打つたる薬篋筒を擔ぎ其歩く拍子に引出の鑲をカラシと鳴響かせ、日盛の炎天に暑氣中りを治す妙薬を賣歩るきたる商人があつたことは中老の人々の皆知る所であるが、名稱はデヨサイと云つたりヂャウサイと云つたり、或はゼサイと云つたりいろくである、「守貞漫稿」には東海道草津驛の東、梅木村に是齋と云ふ薬舗あり、音便にて定齋など、云ひ蓋し和中散を本として製したるものと記し、「膝栗毛」には大阪天下茶屋に和中散せさいの店ありと記し、

「うらゝかな天下茶屋から四方に立つ羽をのす鳶のわちう散見世」の狂歌を添へてゐる。又「風俗畫報」には定齋は延命散と云ふ暑氣拂の藥賣にて炎天にも決して笠を被らすかく日に曝らしても藥功にて暑に中らぬことを示す爲云々とある。

極内で霍亂をする定齋賣 (化)

藥能を笠に着てゐる定齋賣 (化)

私用と見えて定齋屋は笠を持ち (保)

日に焼け繁昌仕候定齋 (保)

などの句は、其事實を證明して餘がある。

不意を打つたる掛取は定齋賣 (政)

箆笥の鑲に枚を叩めて不意打の藥代催促など定齋中々助才がない、「幕末の江戸名高良藥鏡」には横町三丁目肴店とある。

(一二三) 大森の和中散

前項にある通り、和中散と定齋賣とは同物か少くとも混合藥らしいが、其和中散の本家は草津

と云ひ、天下茶屋にもありと云ひ、又大森と云ひ區々である、三馬の「謔字盡」には和中散と書いて右肩にうめのきと訓し「猪はほたんもみぢは鹿とよめ梅木なれば和中散也」と云ふ狂句を添へてゐる、「俚言集覽」には只梅木和中散と出してあるばかりで説明がない、然るに一書(書名逸)には大森蒲田の山本の和中散とて時候中り風邪藥なりとし、鯉丈の「箱根草」にもこの梅園も和中散も山本ださうだのうと云ふ口語をのせて居る、又「金の草鞋」にも大森へ行くと和中散が三軒ありやすお成御門のあるは真中云々とあるされば草津梅木が本物か、大森山本が本物か、但しどちらも本物か、不明なれども川柳の方では大森の方にあてはまる句が多いので、茲には假に大森の和中散として置いたのである。

和中散目移りがして買ひにくい (明)

和中散門のないのは効かぬやう (天)

初上り土産に配る和中散 (政)

前二句は明かに三軒の和中散なるべく、後の一句はどちらとも取れるも、初上りの語から云へば梅木和中散の方かも知れぬ。

(一二四) 烏丸枇杷葉湯

馬喰町三丁目  
 本家 ○ 枇杷藥湯  
 京都 山口屋又三郎

暑氣拂ひの妙藥にて寛政十年板京傳の『四季交加』には上圖の如く書いた長方形の箱二つに棒を通して擔ぎ中に釜茶碗等を入れて歩るいたとある。蓋し定齋賣と同様に行商したものであらう、又夏季になれば前掲三丁目あたりの生藥屋にては京都烏丸の本家に倣うて店先に調製し置き行人の勝手に飲むに任せたものである、但し商標は三本足の烏である。

京の烏を江戸で賣る暑いこと (政)

眞黒に成つて賣るのは烏丸 (化)

暑氣拂ひ母へ半哺の烏丸 (保)

仁心を門でほめてる甚暑也 (天)

初の二句は賣物、其次は烏に半哺の孝を結んで丈の狂句、終の句は接待である」又『金の草鞋』にかう云ふ文句がある「濱松の鍋屋のお岩、お稻どれもそんなに可アねへが、とんだ手があつて

大の烏丸さ云々」此烏丸は誰にも振舞ふの意である、引いて同じく枇杷葉湯とも云つたものと見えて。

撥よりも枇杷葉湯で名をひろめ (政)

追善に枇杷葉湯を後家煎じ (化)

と云ふ不見轉藝者や浮氣後家を詠んだ句がある。

(一二五) 陀羅尼助

又略して陀羅助とも云ふ、苦い氣附藥を賣りに來たものである、本家は吉野にて昔僧の陀羅尼經を誦する時、睡魔を拂ふ爲に嘗めたものとある、吉野大峯に生ずる百草を以て製すと云ひ、せんぶりの根を以て造ると云ひ黄檗の皮を練つて製すと云ひ、諸説いろいろである。

だら助をのんで静は癩をさげ (化)

だら助をねだられてゐる四天王 (化)

甲は吉野にて義經と別れた静、乙は義經に隨ふ龜井、片岡、伊勢、駿河の四人である。

陀羅助は腹よりは先づ顔にき、 (保)



おつそろしく苦いねと、顔を皺だらけにする。

(一二六) 藤八五文薬

是亦江戸時代賣薬行商の著名なるものにて、蛇の目の紋所の印ある薬箱を脊負ひ、藤八五文と高く觸れながら来る、先づ現代のオニチ式である、江戸商標集に掲げある看板によれば本家は長



崎の綿屋藤八にて、賣捌所は駿府のやうであるが、江戸に來たのは文政八年の夏以來にて、二人の男が兩側に分れ、一人が藤八と呼べば一人が五文と應じ、次に兩人相面して奇妙と合唱す、價

は一粒五文にて萬病に効あり、同年七月中村座にて松本幸四郎これに扮し一層の評判となれり、了阿上人の狂歌に「五文にて奇妙にきくか知らねどもきいた風には見えぬ藤八」藤八が住るを聞けば團子坂五文つゝとは奇妙なる洒落」など、ある所より推せば其頃團子坂あたりに假寓せしかとも思はる、幕末の名物番附には中橋とあり、参考の爲附記しておく。

藤八は五文おはなし四文也 (政)

藤八はやし弓師は藤四郎 (政)

甲のおはなし賣とは、富籤の當り番號を瓦版にしたるものを、代四文にて賣歩るきし者、乙の藤四郎は、例の慶安太平記に忠彌尊の謀反を訴人したる弓師にて、只野師と矢師とを秀句に藤八に藤四を對稱した狂句に過ぎぬ。

清正と藤八妙で名が高し (政)

御門番藤八最初びつくりし (政)

甲は南無妙と奇妙その對稱、乙は藤八がごもいんと大呼するのを聞いて、門番がどなた様の御通過かと驚いたとの意である。

## (一二七) 香 需 散

暑氣はらひ香需散より船遊山

(政)

只香需散と船遊山との語呂對稱に過ぎぬが、香需散と云ふ暑氣拂の本店等は未詳。

## (一二八) 紫 金 錠

小日向水道町大阪屋仁左衛門の製出したる興奮劑にて、先以て今日のゼム、仁丹などの類。酒の酔、船駕の酔、氣附けなど、して用ゐられ、粹士の懷には缺くべからざる錠劑であつたのである。「英對暖語」四の八に本郷伊勢傳と云ふ藥屋より賣出す、匂の高い藥、好男子は貯へ置かずんばあるべからずと提灯を持つてゐる。

異見聞く息子齒ぐきに紫金錠

(保)

などはよき説明句である。

十日には陶淵明も紫金錠

(?)

九日の菊見にきこし召し過ぎた爲であらう。

## (一二九) 袖 の 梅

是亦江戸時代専ら粹人通客の間に賞揚せられた酔覺ましの妙藥にて、當時の人情本や洒落本を見れば、屹度藝者の楊枝袋、或は若旦那の紙入から現はれ出るしる物である。「吉原大全」には正徳年間吉原伏見町に住ひし天溪と云へる隱者これを製すとある。「守貞漫稿」にも吉原名物の一に數へ商人の家々にありと附加へ、慶應代版の『江戸名物細見』にも吉原に記してある又「北里見聞録」に記してある所を見れば、第一酒毒をさまし、風引、頭痛、食傷、産前産後血の道、打身落馬、目まひ、立ぐらみ、癩瘡、去痰美聲、消毒一切と所謂藥の能書のやうに並らべ立て、ある、兎も角も吉原と袖の梅とは切つても切れぬ縁故を持つてゐたものにて、

新造が寄つて振出す袖の梅

(化)

袖の梅おあんなんしの藥也

(天)

酔なんしたのと袖から梅を出し

(化)

廓だけ藥の名まで模様めき

(政)

袖の梅道樂らしい藥の名

(安)

袖の梅 薮鶯は名を知らず (政)  
 女房の癩にさはるは袖の梅 (?)  
 袖の梅あれど女房くらはせず (天)  
 袖の梅重き枕を上げてのみ (安)  
 袖の梅のんで上着のまゝで寝る (明)  
 七つ梅振出す袖の梅でちり (化)  
 酔覺の二種七つ梅袖の梅 (政)

など一々説明を要せぬであらうが、七つ梅は第一編に述べた通り木綿屋の銘酒であるが最後の句は迎酒と酔覺しであらう。

(二三〇) 四目屋長命丸

井守みもりの黒焼の元祖として知られたる、兩國四目屋の長命丸は最も著名なる淫薬であるが『通詩選諺解』には元祖明應中初て長崎に渡り寛永中江戸にて賣始むとある所より考ふれば、根本は異國より傳來せしものと思はる、其他角先生はしかた、芋莖いじぎら、等各種の淫具をも販賣し、來客の出入を氣安

からしむる爲に、屋内を薄暗くしてよく顔の見えざるやうにし、店頭みせの招燈には黒地に四つ目結の紋所を染出しありしとのことである。

買ひにくひ薬行燈に目が四つ (化)  
 氣が弱くちやあ四つ目屋は買はれぬよ (天)  
 暗い商買行燈を晝もつけ (政)  
 四つ目屋は得意の顔を知らぬ也 (化)  
 長命の薬裏からおもに賣れ (保)

此句によれば、裏口からも出遣入したらしく思はる。

馬鹿に附けるを暗闇で賣つてゐる (安)  
 頼まれて來たと云はねば買ひにくし (天)  
 四忠へ無口な御用頼まれる (天)  
 四つ目屋へ晝買ひに來る信濃者 (天)

是等の句によれば、夜中窃に求めたるものらしく、或は餘り饒舌しゃべらない酒屋の樽拾ひ、又は少々薄ぼんやりした米搗などと云ふ手合が譯は知らずに頼まれたものと思はる。

ても暗い内だと御幸腰をかけ  
にこくと御幸は桐の箱を出し

(安)  
(化)

御幸とは大奥女中の使役に従ふ下僕にて、常に御幸籠と云ふものを携えて買物の使などに出たものである、奥女中の内命を奉じて何を買に来たか、又桐の箱に入れた何物を長局に持ち歸つたかは讀者の判断に任せるより外はない。

石摺の行燈後家の合薬

(化)

老武者は佐々木に勢を借りる也

(化)

二共に黒地に白い四つ目。

茶をのんで短命丸にしてしまひ

(政)

儲て長命丸とは如何なるものであるか如何に使用すべきものであるか、又如何なる効果あるものか著者は全く見たことさへ無いので不可解であるが、某書にて見た其効能書の通りのこと巧に隠した珍文がある、是にて大凡を推察せられんことを望む、感和亭鬼武の著はした「舊観帖」と云ふ本に、江戸見物に來た田舎の婆様が長命丸を長壽の薬と思ちがへて、三十二文袋を買ひ塗薬と知らずに買つて一息に飲み下した所が暫くするとその効果が現はれて來たその形容に、「婆

々はぐつと熱くなり、ものを云はずだんくしやきばり立あがり、恰も棒を呑んだ人を見るやうに突張り、溜息ばかり突いて顔色紫色に赤みばしり云々」夫から肝を潰した案内者のもさ引が機轉をきかせて、温茶を吞ませた、所が漸く沈まつた、そこを「茶に水をうめていやがる婆々の口へつき込んでやる、此茶咽へ通ると思ふ頃たちまちグニヤくと成りて床机に腰をかける云々」と、書いてある、少しく隔靴痒搔の感はあれども、是以上の説明は出來ぬから是非がない。

(二二二) 堀越固本丹

切腹をした看板は固本丹

(明)

家傳 秘方 延齡固本丹

一廻代 知人參 三百五十銅  
上野お成道行當り  
新黒門町西側角

堀越七郎右衛門

句義不明なれども、腹部の内臓を現はした看板にてもありしかと想像せらる、腎薬の一種にて「類柑文集」に「老とりの今日若き固本丹」と云ふ句が附記されてゐる鬪雞の句らしい只参考として添へて置いたのである。

## (一三三) 王子五香

「江戸砂子」の記する所によれば、「王子東光院金輪寺より出す薬にて萬病に効あり、これを乞ふもの小音なれば徒弟の私に合せたる薬を與ふ故に、大音によへば住職の耳に通じて私ならずとて今に大音に案内す云々」とある。

金輪寺お薬取を食しんぐつ附かせ (政)

五香よぶ聲はつんばを叱るやう (政)

一粒金丹を大音でたのんましよ (政)

最後の句は、多分この句ならんと思ひ並べては置いたが不確である。

## (一三三) 大阪屋すぼうとう

薬研堀の大阪屋平六(略して大平など、云ふ)は著名なる生薬屋なるが、其店より賣弘めたるすほうとうと云ふ薬は聲をよくする功能ありと謂はれてゐる。

平六がとこすぼうとうよく賣れる (安)

大阪屋は踊子の本場たる橘町の近くであるから美聲樂のよく賣れるのはさもあるべきことである、猶大槻磐水先生の「蘭説辨惑」に「ズボートーは蘭名ドロツブス、スートホート、甘草を煎じ詰めて膏となしたるものなり、痰飲諸病すべて胸膈をゆるめる効あり」とある、さればすほうとうを甘草薬と稱するは其爲であらう。

大阪屋寝言を書いて家根へ出し (安)

ドロツブス、スートホートと云つたやうな、唐人の寝言のやうなことを、牛の涎のやうな文字で書いた看板などを、檐先に掲げて大にハイカラ振を示して居たと見える。

踊子の咄大きなウニコール (安)

なども單に大阪屋店頭の叙景を踊子の口を借りて述べたものにて、大きなウニコールが店先に並べてあつたものと思はる、ウニコールとは一角魚と云ふ鯨類の海獸の歯にて長さ一間以上もある鱗のやうなもの、昔は毒消薬などとして多く用ゐられたものと聞く、猶多くある平六の句中より参考迄に二三を抄録しておく。

橘の中に袋を一つさげ (安)

見世の戸をとたんとおろす大阪屋 (寛)

町内の匂袋で船へ出る

(天)

平六で聞けと船から呼にやり

(安)

薬種屋の近所へ留守居入れあげる

(天)

の下三句は皆踊子であるが、踊子は御留守居に馴染が多かつたものである。

(一三四) 清明丹

本町四丁目にあり、聲の出る薬であることは、

しやがれると藝子せいめい丹をのみ

(安)

の句にて証明が出来る。

(一三五) 浅田のいれのこりこ

『風俗』と題する古い雑誌に、江戸時代有名なる商店の暖簾を掲げてある、其内にいれのこりこ  
うと云ふ目薬の看板が出てゐる。其記する所によれば麻布飯倉四丁目浅田といふ内にて賣り、も  
と大阪の醫者浅田壽庵が一子相傳の祕方、入器は必ず蛤の殻を用ふとある文字只七字の假名にて

書いてあるのみ、入残膏の義にてもあるにや。

貝の膏薬片寄せて藪にらみ

(保)

八ッ目より七つの假名は目の薬


(化)

(一三六) 奈良屋北斗香

息子には目の毒となる北斗香

(保)

水戸や丸 上町黄金東華 東



北斗香

めぐりり

野次所大徳了町三丁目

大徳了町三丁目

平七

と句ふ一句を見出した丈である、句義は北斗香と云ふ目薬は息子丈には却て毒になるとの意にて、北斗を北極星即ち北國に光り輝く入山形に星形の花魁に擬した趣向である。

(一三七) 笹屋目薬

笹屋でもさて治し難き藪にらみ

(政)

只笹と藪との縁語を結んだる狂句に過ぎぬ、笹屋は幕末の江戸名物番附には本郷四丁目とある。

笹屋の痲痺御利益の眞光寺

(保)

詳細は不明であるが、只句面より推解すれば、眞光寺と云ふお寺から更によく利く目薬が出たので、笹屋の方で肩を凝らして氣を揉むと云ふ事のやうである、十世平井川柳翁は市谷堀端に笹屋と云ふ小間物屋(著者曰く佐内坂の笹屋粟焼とは別なるか)ありて、此内より笹屋目薬とて文錢を包みたるものを賣る、これを買ひ來り煎じて目を洗ひしと記憶するも確には覚えぬと咄された、或はそんな御夢想的の靈薬があつたかも知れぬ。

(一三八) 無名圓

本家は不明であるが、到る處の藥屋にて、賣られた打身藥にて俗に無名異とも呼んだのである、澁柿園の書いたものの中に、佐渡の金鑛中にある鐵の赤錆にて製したるものであるが、茶人は藥用とせずしてこれで土瓶などを鑄て珍重したなど、ある、此藥は文久頃までありしも今はないとのことである。

俄替女母は涙で無名圓

(天)

無名圓つける夜這は不首屋也

(天)

甲は泣かずにば讀まれぬ句、乙は笑はずには讀まれぬ句である、

生藥屋かけて來たのは無名圓

(明)

無名圓ききに歸つて叱られる

(化)

藥屋まで驅附けて來たはい、がサア大變、名を忘れた、周章て、聞に歸つたので此馬鹿奴と天窓をボカリなぐり附けて其瘤に附ける藥だよ。

ヤレ無名圓と名歌が一首出來

(化)

僧正遍昭の落馬、「お打身はいかゞさてく、い、お歌(寛政)」は最も適切な説明句である、「名にめで、折れるはかりそ女郎花われおちにきと人に語るな」

無名異を解くうち柱たゝいてる

(天)

「うぬにくい柱と乳母はくらはせる(化)」と云つたやうな場合であるが、無名圓は酒に溶いて用ゐると云ふやうな文句が鯉丈の『八笑人』中に見えてゐる。

(一三九) 白 龍 膏

生娘に懲りて白龍膏を買ひ

(天)

の句にて爪などにてひつかゝれた疵の薬であることは明白である、幕末の江戸名物番附には日本橋傳馬町とある。

(一四〇) 駱 駝 膏

脊の瘤へつけて見ようと駱駝膏

(保)

是亦本家等は不明であるが、句義は駱駝の背峯を臭はして瘤に張るとの意。

(一四一) 美濃屋梅花膏

氷裂に梅花をつける下女がひゞ

(政)

日本橋南横木町河岸美濃屋の賣出しにかゝる**鞆胼肌**の妙薬にて、梅花氷裂と云ふ成語を割つて詠んだ狂句に過ぎぬ、『狂詩選』には、南横町邊金瓢簾、梅花萬能諸瘡安、就中賣弘消毒散、日香一匙不侵寒、とある通り金瓢の商標であつたらしい。

(一四二) 德兵衛膏藥

「忘れ毒り」に「奥州岩沼徳平としるしたる箱を待ちあかぎれの薬を賣り歩るきたり」と、ある

あいたいと徳兵衛さんを下女は待ち

(化)

ほまち錢下女徳兵衛に入れあげる

(化)

(一四三) 熊野傳三膏藥

是亦徳兵衛と同じく、傳三の熊の油とて大道などに熊の皮を敷き、熊の皮の袖無を着し、山賊の出来そこなひの様な風をして疵薬などを賣つたものである。

鬼童丸かと思つたら膏薬屋

(政)



黒牛の皮を被つて市原野に潜伏した鬼童丸そつくりの扮装。

きつゝなれにし皮衣傳三郎

(政)

下女が足熊野傳三へ入れあげる

(政)

熊の子は傳三へやるとおどされる

(政)

そんなに悪戯いたくをすると、傳三に呉れてやるぞと母熊に叱られて、子熊は縮み上つて怖いよう。甲句はからごるもの駄洒落。

(一四四) 居合拔の賣藥

大道に幕を張り、恐ろしく長い太刀を飾り、三方の上などに乗つて居合を抜き、其拍子で齒を抜いたり、或は手品獨樂廻はし等をなして齒磨をはじめ口中一切の藥を賣つたり、或は態と銳刀にて腕などを傷け即座は治して見せて疵藥を賣つたりした大道藝人を兼ねた賣藥屋があつたこと先刻御承知のことであるが、淺草お藏前の長井兵助などは特に著名であつたのである。常に淺草奥山或は上野山下等盛りの場所に出て技を演じたものにて『狂詩選』に看板太刀正面飾。兵助居合上三方、人々待得今將拔、齒入齒磨口上長、とあるが。

三方へ片足あげて賣つける

(化)

柄に手をかけねめまはすと齒磨

(寬)

鏝元をくつろげてゐる藥賣

(天)

大太刀を抜きさうにしてよしにする

(寬)

人寄せに二腰程は駄目を抜き

(寶)

などは恰もその詩の柳化とも云つべき句である。

太刀風で家傳齒磨賣りちらし

(保)

何事ぞ齒を抜く人の長刀

(保)

侍にまぎらはしきは居合拔

(保)

さて長い刀とせなッびつくりし

(政)

納めると人の逃げ出す居合拔

(保)

藥賣のは納めると人が散り

(天)

醉狂人のは抜くと人が散る。

劍戟を振つて藥を賣りつける

(明)

其 鋤 乃 鉅  
 驚 百 姓  
 齒 磨 救 香  
 喜 勤 養  
 石 扇 亭 廣 俊



雲 城 義 軍



二三合戦ひ薬賣りつける (安)  
 大太刀を極めて鼻糞賣りつける (天)  
 膏薬屋目を明にくらませる (天)  
 薬賣日がな一日血判し (明)  
 などは多く膏薬賣の方である。

羅宇のすげかへ竹澤のには困り (政)  
 竹澤へ落ちる上野の虫くひば (保)  
 竹澤は獨樂で内所がよく廻り (政)  
 源水は齒抜き目抜きは芥子之助 (政)  
 紺地に白き立葵獨樂廻し (化)

の初三句は竹澤藤次、後の二句は松井源水、いづれも名高き獨樂廻しであるが、目抜きの芥子之助とあるは巧に豆と徳利とを手品に使つた大道手品師である。

〇 (一四五) 兼康祐元齒磨

兼康は齒磨口中薬の元祖で、芝柴井町に家を構へ大道にて居合抜などはなさざりしもの、やうである、『狂詩選』に看板假名名字白、兼康數代齒磨香、口中諸病多奇薬、盡是祐元家祕方、とある。思ふ看板の假名とあるは今、泉岳寺の寶物と成つてゐる堀部安兵衛の筆になれるかねやすゆふけんの板看板のことを云つたものであらう。

兼祐は不斷祭の通るやう (天)  
 の句は店頭常に澤瀉の定紋打つたる幔幕を絞りからけ、屏風などを立て威儀堂々たる風を装うて居たからであらう、又、

芝と本芝世にひゞく鐘と兼 (兼)  
 と増上寺の大梵鐘と對稱するなど聊か誇張の感はあれども、兎も角相當に聞えてゐたものであることが解る、又本郷三丁目より東へ切れるところを兼康横丁と稱したのは、其角に兼康祐悦と云ふ口中醫者住居し、亂香散と云ふ著名なる齒磨、粉を賣りし爲とあるが、此兼康は芝のの outlet であると云ふ説も聞いた。

本郷も兼康は江戸の中 (？)

此年の年代を逸したるも思ふに明和代前後の句なるべく、可なり汎く人口に膾炙して居る句で

ある。現今の化粧品舗たる兼康は本郷三丁目電車の交又點にありて、帝都の中心と迄は行かずとも、一里やそこら歩いた分にはまだ田村には達せないのに、今から百五十年前は兼康あたりが江戸の出切であつたと聞いては今昔の感に堪へぬ。

本郷の屋根に神農かゝりうど (保)

兼祐でばかり神農壁にされ (保)

兼祐は嘶を聞いて壁へ張り (明)

などの句面上より推考するに、或は屋上の壁に神農の像にても描きありしかと思はるゝも全く想像に過ぎぬ。

澤瀉を神農横ににらめつけ (安)

梅の近所に澤瀉も匂ふなり (化)

果して此神農が兼祐なれば澤瀉（おろ）は三四丁日の向側伊豆藏横町の角にあつたと云はるゝ生薬屋の澤瀉であらう、さうして梅は云ふ迄もなく加賀様である。

兼康はお七を見るとたゞきたて (安)

例の芝居や講談で名高い八百屋お七は、近所のことであれば時々兼康の店先を通つたであら

う、何をたゝいたかは不明なれども、見世の若い者共が、そら又評判の別嬪が通るぞと齒磨粉を挽く臼の縁などを打たくとならんか。

(一四六) 井口の齒磨

上野廣小路三橋の側に井口と云ふ薬店ありて、齒磨を賣出した趣が、或る本(書名逸)に記してある、されば、

井口と井上口上の門ちがひ (政)

と云ふ狂句の井口はそれなるべく、井上は其向うにあつた井上筑後の屋敷である。

(一四七) 白雪糕

神田豊島町米屋七兵衛に依つて賣出された有名なる乳粉である。

瘠せる子を抱いて尋ねるとしま町 (政)

七人目白雪糕で育で上げ (化)

七人の子はなすとも女に心許すなど云ふ諺から考へても、七人と云ふは、産兒數の殆んど極